

---

# 異世界に行った転生者の魔術師

腐ったキビ団子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界に行った転生者の魔術師

### 【Nコード】

N3318T

### 【作者名】

腐ったキビ団子

### 【あらすじ】

俺はなぜか転生者でなんか不幸補正付いててしかも名前が同じな幼馴染に巻き込まれ毎度毎度ヤクザと喧嘩したりマフィアと喧嘩したり、小3になったら変なオッサンにあって魔術を覚えたり魔術師ギルドに入ったり拳句の果てにはヤクザから幼馴染の友達を助けた直後に異世界に召喚ってどういことだこの野郎、しかも幼馴染とははぐれちまうしこれじゃ帰る手段あるのに帰れないだろうがどうしてくれんだコラア！という話、つーかこれ転生者設定いらなくね？

俺と鷹峰の日常 前編(前書き)

前回の失敗を生かし再び投稿

翔つば「また削除とかねーだろうな」

.....

翔「だんまりかよ!!」

それじゃどーぞ

## 俺と鷹峰の日常 前編

終業式が終わり校内の生徒が一斉に下校する

その中には当然中3の俺も含まれる

「鬱だ・・・」

明日から夏休みなのになぜか憂鬱なのは受験勉強とか隣の馬鹿が持つてくるトラブルとか隣の幼馴染が持つてくるトラブルとか隣の鷹峰翠が持つてくるトラブルとか・・・

つまり憂鬱の原因の8割は隣に住んでいる馬鹿な幼馴染、鷹峰翠が原因というわけで

多分今日も巻き込まれるんだろうなーとか思いながら校門を出、視界に入った一っ年下の幼馴染の少女を見てリターン、バックそしてリターン・・・あれ？意味分からなくなってきた

まあ取り合えず校門に戻り校舎内に戻り下駄箱を隠れ蓑にして裏口に直行

そして裏口の扉を開け

「やあ」

目の前に立っている黒髪黒目の幼馴染の姿を確認しショックのあまり膝をつく

「はえーよ！さっきまで正門に居ただろうが！」

「私を出し抜けると思ったら大間違いだぞ小鳩こはと」

俺は文句を言うが実際こいつを出し抜けるなんて思っていない

そもそもこいつを出し抜ける人間が居るとは思えない

成績優秀運動神経抜群容姿端麗、運もよすぎる位にいいけどトラブルメーカー

できない事はあまり無い

そんな化物女を出し抜けるのはそれこそ仙人とか神様とかそれが俺の所属する『ギルド』ぐらいの物だろう

ただいつもいつも面倒くさいトラブルを持ってくるのは止めて欲しい

友達がマフィアにさらわれたとか言って殴り込みにいっただけならまだいい

別にこいつがマフィアに殴り込みにいってその友達を助ける事に成功しようが失敗しようがどうでもいい

死んだとしても俺には関係ない

トラブルメーカーが居なくなってくれただけだ

ただその殴り込みに俺を巻き込み、俺の友人を巻き込むのは止めて欲しい

今さっきのやり取りを見れば勘違いする人も居るかも知れないが俺と鷹峰は別にいつも一緒に帰っていると言っわけではない

幼馴染で家も隣なので一緒に帰る事というのはよくある

だけど俺と鷹峰はまず学年が違う

もちろん授業時間も若干違う

今日のように終業式の日は同じだから一緒に帰る事がある

だが今日は偶々担任の話が長引いたせいで（不要物を持ち込みそれをトイレに置いてきた奴がいたのである。犯人が見つかるまで教室に居残りとなった）俺達のクラスは他より1時間帰るのが遅れた

つまりこいつが待つ理由が無いのだ

それなのに待っていたと言っ事は

「また何かトラブルに俺を巻き込む気じゃあるまいな」

「巻き込むとは人聞きの悪い。協力して貰っただけだ」

「それを巻き込むっていうんだよお前の場合」

こいつの持つてくるトラブルはそこらの中学生の比じゃない

あえて言っなら小学生の比じゃない

小学校の時からマフィアとかヤクザとか暗部とか変な単語が入って居たほどだ

「分かった分かった。準備すつから待ってる」

「そう言っつて逃げる気じゃあるまいな」

「逃げねーよ」

ちよつとエスケープさせて貰うだけだ

「それを逃げると言っつんじゃ無いのか？というかエスケープは日本語に直せば逃げると言っつ意味だつた気が・・・」

「冗談だ」

逃げたら最後、部屋にしのび込まれて俺の部屋の大事な物、主に保健体育のちよつと過激な参考書

それらの物品が晒される

黒板に貼り付けられ持ち主の名前が記入される

一度それでトラウマになった

「ちよつと『本』とっつてくる」

「おーけい」

「それで今日のトラブルは？」

「クラスの友達がヤクザに攫われてな。大方、下位組織を潰した私への復讐か何かだろう。3時までには港の倉庫に來なければお友達の命は無いつてさ」

「わざわざお前に直接喧嘩を売る奴が居るとは・・・」

今までここまで直接こいつを呼び出して喧嘩を売る奴は滅多にいなかった

特に最近はこのつに手出しすれば命が無い事を皆理解しているようで

誰一人こいつに喧嘩を売る馬鹿は居なかったんだけど・・・

さて、『本』も準備したし

「行くか」

俺と鷹峰の日常 前編（後書き）

主人公の秘密とか事情は次回でさっさと明かします

それじゃまた次回！

作者名は昔使ってたHNです

俺と鷹峰の日常 後編（前書き）

2話目です

とりあえず前回のあらすじ

ベッタベタな事をするチンピラみたいなヤクザを退治しに行つて来  
ます

つーかただのチンピラだよな

## 俺と鷹峰の日常 後編

小学校3年生の時の話をしようと思う

突然ですまないがこれを話さないと話が進まない

これから港の倉庫に突入するわけだけどその後起こるさまざま現象を説明する為にはそれを扱えるまでになった経緯を説明する必要があるからだ

はっきり言えば、俺は魔術、魔法といった類の物が扱える

それこそ鉛筆を削る程度の物から街一つ丸ごと焦土に返る事が出来るほどの物まで

当然最初から使えた訳じゃないし生まれつきそんな物が使えるとしたらそいつは何処の転生者だ

と言いたいところだけど俺自身転生者なので言える立場じゃないのかもしれない

原因はよく分からないが俺は赤ん坊の時から名前以外の記憶を持たままこの世界に生まれた

最初は二次創作の如く漫画やらなにやらの世界かとも思ったけどしばらく暮らしているうちにそれは違ったという事が分かった

幼馴染のチートを見たときにはめだかボックス?とか思ったけどそいつが病院で異常診断を受けることも無ければ箱庭学園なんて学校

は無かったし

黒神なんてお金持ちの名前も無かった

ジャンプを見れば一目瞭然

めだかボックスは普通に連載されている

他にもいろんな漫画の可能性を考えて見たけれど結局は普通の世界だと分かった

ただしそれも小学校3年生までだった

ある日、いつもどおり（？）幼馴染の持ってきたトラブルのせいで俺は黒服の人に追われたりしていた

なんでこんな田舎町に黒服の人なんてのがいるのかとか色々昔は疑問に思ったりもした

そのまま河原に逃げ込み気配を消して身を隠し

俺はそこで魔術師を名乗るオッサンに出会った

なんかかんやで魔法学校への行き方を教えてもらいそこで3年間（現実時間では3週間）魔法を習い

結果、三賢者なんていうとんでもない称号を得てしまった訳だけれども

ついでに白と黒の魔道書というとんでもない魔道書に選ばれてしま

ったりもしたけども

『ギルド』なんてよく分からない組織に所属する事になったけども  
さらにドラゴンと戦ったり色々あったけども

今ではドラゴンなんざ片手で殺せる（もちろん魔術使用）程に成長  
しましたとさ

いやゴメンいい過ぎた

片手は無理

でも倒せる

めでた・・・くない

全然めでたくない

回想終了

そんな訳で、さっき言った『本』というのは回想で言った白と黒の魔道書の事である

これは基本的に補助アイテムのような物で別に無くても魔術は発動できる

ただ詠唱が長い魔術などの詠唱を4〜5文字程度の長さまで短縮出来るので持ってきた

その他にも魔法陣を必要とする大魔術なんかは魔法陣そのものが本に刻まれている為楽に発動出来る

ぶっちゃけ今は必要ないと思うけど

ちなみに転生した影響か俺の魔力はほぼ無限大です

そんな訳でこれより港の倉庫に突入しますっつと

「  
」

## 魔術詠唱

詠唱は基本的に一般人には聞き取れない言語を使っている

もちろん俺達魔術師には簡単に扱える

本来ならばもつと長い詠唱なのだけれど魔道書のおかげでこの程度まで短くなった

ちなみに効果は

「火弾を放つ」

ドゴオオオン！！と轟音が鳴り響き倉庫の扉が吹き飛ぶ

欠片も残さない程に粉々に

中のヤクザは啞然としていた

「はろーヤクザの皆さん。うちの幼馴染の友達を拉致った落とし前はきっちり取ってくれるんでしょーね」

「な・・・なんだテメエは！！」

「うん？魔術師だけど？」

某バーコード魔術師っぽい台詞を言いながら叫んだヤクザの目の前に身体強化魔法と風の魔法で瞬時に接近し顔面に拳を叩き込む

ヤクザその1は天井まで飛んで突き刺さった

「うちの幼馴染に喧嘩売る奴は久々に見た。それだけ腕に自身があるってことだろ？なら楽しませてくれるよなア？」

俺はヤクザ共を睨みながら言う

「くっ！」

懐から銃を取り出したヤクザの背後から鷹峰が近づき背中に拳を叩き込む

情けない悲鳴を上げながらヤクザBは地面にめり込んだ

統一？面倒

「死ねやあああああああ！」

叫び声が聞こえた方を見て見るとヤクザCが機関銃をこちらへ向けていた

撃つ気満々である

つーかどこで調達したそんなもん・

「  
」

再び魔術詠唱

それと同時に機関銃から弾丸が大量に放たれた

一分で何百発という勢いで放たれた弾丸は全て俺の半径3mの範囲に入った途端、止まった

正確にはスピードが落ちているだけで一応動いている

大体時速10cmといったところだろう

「な・・・なんじゃこりゃあああああああああ！」



「さて、全員片付いたかね」

「らしいね」

俺の問いかけに鷹峰が答える

辺りにはヤクザたちの亡骸（死んでない）が転がっている

鷹峰のワイシャツは返り血で真っ赤に染まっていた

「とりあえず返り血どうにかしないと駄目じゃね？」

「そうだな」

ちなみに助けた女の子は記憶を消した上で学校の教室に転移させた

俺達も帰ろうと倉庫を出た瞬間

地面に魔法陣が展開された

「は？」

「小鳩！なんでここで魔法を使う！！」

「俺じゃねーよ！！あと俺のは魔術だ！！」

「同じだろう！」

「同じだけど！！」

呼び方の違いでしかありません！

っーかこれ・・・召喚魔法！？冗談だろ！？

しかも異世界に繋がってる

えっと携帯携帯！

持ってきてるよな今日は！！

俺は手元のバッグの中をあさる

入って無い

冗談じゃねえ！！

俺は近くのヤクザを転移魔法で手元に引き寄せ服の中をまさぐる

出てきたのは真っ黒な携帯

「これでいいや」

ギルドへの連絡なら番号なんて必要ない

既に俺は腰まで沈んでいた

さっきのヤクザまで一緒に召喚されるのは面倒なので魔法陣の外に向かって投げる

無事にヤクザは倉庫に帰還した

「オイなんだこれは！」

「召喚魔法、俺達異世界に行く事になりそうだ」

「私もか！？」

「お前もだ」

脱出する方法は無い

「ふざけるな！異世界と言ったらあれだろう！？魔物とかそんなのがいるんだろう！？生き残れる自身ないぞ！！」

「嘘つけ、お前なら確実に死なんだろうに」

「死ぬわ！！私だって死ぬ事ぐらいある！！」

そっぴやあつたな

24時間ぐらい死んでた事あったこいつ

心臓止まっていたのにいきなり起き上がったときは吃驚した

「あー、だめだ。もう遅い」

「うわあああああああああああ」

つーか鷹峰がこんなに取り乱してるのは初めて見たな

写真に取りたいが生憎この黒い携帯にはカメラ昨日はついてない

俺はそこまで取り乱しては居なかった

異世界なら何度か行った事がある

この魔法陣の行き先は行った事の無い世界だけど携帯さえあれば魔術回線でギルドの人間と連絡が取れるので問題ない

いざとなれば迎えに来て貰えばいい

次元移動魔術なら自分でも使えるけど2人は割とキツイ

「さて、今回もまた魔王退治かね？それとも魔王になるのかねー？」

呟いたと同時に俺と鷹峰はこの世界から消えた

## 俺と鷹峰の日常 後編（後書き）

冒頭からいきなりすみません

別に少しずつ明かしていくというのもありなんですけど作者の文才が無さ過ぎる為そう言う方法を選択すると確実に伏線残したまま終わる、またはまたしても削除なんて事になりそうなのでさっさと全部明かしました

ギルドの人間については追々紹介していきます

次回予告

気が付いたら森の中ではぐれていた

狼に囲まれ絶体絶命

にはなりません

それじゃまた次回！

## 異世界に行った転生者の魔術師（前書き）

3話目です

タイトル考えるのって大変だよな

それと今までまったく描写しませんでした。が主人公は銀髪碧眼という容姿です

理由についてはごく一般的な物で詳しくは作中で

それじゃ前回のあらすじ

ヤクザをぶちのめしたら地面に魔法陣が……ってこれ召喚魔術じやん！

## 異世界に行った転生者の魔術師

転移した場所は森の中だった

周りには誰もいない

鷹峰さえも・・・は？

「鷹峰っ！？」

そう、一緒に飛ばされてきたはずの鷹峰すらもいない

まさか次元の狭間において行かれたんじゃないだろうな

「そうだとしたら厄介だ。助けようにも助けられん」

俺に厄介事を持ち込んでくるような奴でも一応幼馴染だ

心配くらいする

「まああいつなら大丈夫だろう」

5秒くらい

そもそもあいつを心配する必要があるとは思えないし

どうせあいつの事だ

もし次元の狭間において行かれたとしても案外なんだかんだで助か

ったりするだろう

無事に召喚されてたとしてもそれならそのうち会えるだろうし

それで化物に襲われても多分無傷で生還出来るだろうし

「とりあえず森から出たほうがいいか・・・その前にギルドに連絡して」

俺は懐からヤクザから奪った黒い携帯を取り出す

電話帳には怪しげな名前や会社名がずらりと並んでいた

その中から適当に一つ選び魔力を流しながら通話ボタンを押す

コール音が鳴り響く

p r r r r p r r r r

『もしもし』

よし繋がった

「小鳩だけど雀いる?」

『あ、はい今代わります』

通話先から雀さん電話ですよーと言う声が聞こえた

程なくして雀の声が聞こえる

『翔おはさーーん！お久しぶりです！元気でしたかーーーー！！』  
無駄に声がでかい

雀はギルドの同僚の一人で魔法学校でも同じクラスだった

特徴としては栗色の長い髪に黒い目

あと身長が小さい

『誰が小さいですか誰がアアアアアアアアアア！！』

「心を読むなちっさいの」

『ウガアアアアアアアア！！』

見れば分かると思うだろうがこいつは語尾がカタカナになる

こんな感じ二

あと小さいは禁句

フルネームは峰岸雀みねがしすずめ

妙に人懐っこいというのも特徴の一つ

ついでに言うと俺のフルネームは小鳩翔こはば

幼馴染である鷹峰翠と名前の読みが同じである

だから俺はあいつを名前で呼ばない

『それで何か御用でしょうか？』

「ん？ああ、なんか知らんけど異世界に召喚されたからしばらく帰れないんだ。それでな、情報操作の方頼みたいんだけど」

『情報操作って事はしばらくそっちに残るんですネ？』

「そう言ってるだろ」

『わかりましたー！まっかせといてくださいー！』

「頼んだぞ。ついでに鷹峰の方も頼む」

『一緒に召喚されたんですカ？』

「ああ、だから一人で帰るわけにもいかねーし……だからしばらく帰れない」

『一緒じゃないんですカ！？』

「うん。多分この世界のどっかにいるとは思っただけど……」

一応鷹峰の生体反応は感じるし

魔術を使い続ければその辺の感覚も敏感になるのである

ドラゴンボールを想像してくれればいい

とはいえ場所までは分からない

あくまでこの世界に居るのが分かるというだけだ

『あー、つまり別々の所に落とされてしまったんですネ？そりゃ探すのは大変でしょう二』

「まあな・・・まあ人為的に召喚されたなら多分勇者か魔王にでもなってるだろ」

魔力があれば探すの簡単なのに

あいつ魔力だけは皆無だから・・・

『もしくは王様ですネー』

私経験ありますシと雀は呟く

その時の情報操作は俺がやった

今回のように夏休みに起こった事じゃなかったのかかなり大変だったのを覚えている

「王様・・・ねえ・・・」

『まああの人に王様は似合わんでしヨ。多分勇者か魔王ですネ』

「予想すんな」

『はいはい』

「それじゃ、またそのうち連絡するから」

『おっけーでス！それじゃー！！』

プツリと電話が切れる

俺は携帯を仕舞い辺りを見回す

周りには1000を超える数の大きな狼

何時の間にか囲まれていたらしい

にしてもすごい数だ

「初っ端からバトルスタートとか冗談じゃねーっつーの」

「うえ・・・まずっ」

焼けた狼の足をかじりながら呟く

俺の下には黒こげ、氷付け、感電などの理由で死んだ狼の死体がある

まさに死体の山

俺はその上で焼けた狼の足に塩をかけて食べていた

だが不味かった

なんで塩があるなんて質問は受け付けません

「毒は無いんだけどなー毒は」

Q・なんで食おうと思ったんだろう

A・焼けた狼からいいにおいがしたから

だっっておいしそうなおいだっただんだもの

マジで

食べてみたらクソ不味かったけど

「さて、とりあえず森を出るのが最優先かな」

狼の山から飛び降りる

「  
」

大量に残っている狼の死体を魔術で跡形も無く消し去り歩き出す  
すると目の前に女性が3人立っていた

武装しているところを見ると傭兵か何かだろうか

1人は金色の長い髪に赤い目の女性

手にはロングソードと鋼の盾

かわいいというより凜々しいと言ったほうが正確だろう

1人は銀髪碧眼の女性

髪は短く肩口で切りそろえてある

落ち着いた雰囲気

杖を持ってローブを着ている所を見ると魔術師か何かだろう

1人は蒼い髪に蒼い目をした女性

髪のは腰ぐらゐまで伸びている

印象としては大人しそう

装備は双剣

赤い剣と青い剣

どうやら魔法剣のようだ

剣から赤いほうからは熱気、青い方からは冷気を感じる

「あなた・・・何者・・・？」

1人目の金髪の女性が俺に問う

答えるべきか答えぬべきか

「答えないなら実力行使に出ますよ？」

魔術師の女性が杖を構える

いきなりか・・・

先端に魔力が集まってい

「炎よ集いて弾となれ『ファイアボール』」

古典的な詠唱

この程度なら消すのも造作ない

「  
」

詠唱と同時に目の前に透明な魔法壁が現れる

ファイアボールはそこに着弾する

辺りが爆発による煙で包まれた

「  
」

四方を囲うように魔法壁を創り何処から来ても防御できるようにする

「ハアアア!!!」

上から双剣を持った女性が雄たけびを上げながら跳んできた

双剣を振るう

すると双剣からブリザードと炎が同時に放たれる

「  
」

ブリザードと炎に対し俺は雷を放つ

その雷はブリザードと炎を無視し女性に直撃した

「ぐっ！」

ブリザードと炎はもう一枚魔法壁を出すことによって防ぐ

4枚の魔法壁を消しバックステップで後ろに下がる

「  
」

風魔法で煙を払い視界を広げる

身体強化魔法で自らの身体能力を上げ一気に近づいた

「「なっ・・・！」」

「バアイ」

ガンという音が2度響く

ドサリと女性2人が倒れる

「さて、どうするかね」

さすがにこのままにして置く訳にもいかないし・・・

だからといって起きるのを待ってたら再戦するはめになりそうだ

とはいえ森から出るなら彼女らに協力してもらった方が楽だ

「う……ん……」

悩んでいると最初に気絶させた双剣使いが目を覚ました

「おはよう」

「ひゃああー!!」

そんなにビビる事ないじゃん

というか起きるの早いな……まだ5分も経ってない

やっぱ手加減した雷魔法じゃ大した効果は得られなかったか

「そんなビビる事ないだろ？別に怪しい者じゃないっての」

「信じられるわけが無いでしょう！」

「そこは信じようぜ……ハア……とりあえず自己紹介、俺は小鳩翔。同じ名前の読みした奴がいるから俺はコバトって呼んでくれ。ちなみに銀髪碧眼は祖父譲りだ」

「……」

警戒されてる

あ、今まで描写してなくて悪いとは思ってたけど俺は銀髪に碧眼だ

祖父がイギリス人でそのため俺の髪は銀髪

祖父の血が色濃く出たらしい

ちなみに顔の形なんかは日本人

違うのは髪と目の色だけである

閑話

「・・・・・・・・・・・・・・・・シャイネよ」

「シャイネ・・・おっけ把握」

「もう一度聞くけど・・・あなた何者なの？あの数のウォーウルフをたった一人で討伐するなんて」

「ただの魔術師、まあこの世界の魔術とは随分と違うみたいだけど」

「この世界・・・？まさか異世界から？」

「まあそうだな」

役割がなんなのかは分からんけども

「気が付いたらここにいた。召喚魔術でここに連れてこられたのは覚えてんだけどどうやら転移に失敗したらしい。気づいたら森の中だ」

その上狼・・・ウォーウルフだったけ？

あれに取り囲まれてるし

「はぁ・・・」

「そんな訳でとりあえず森から出たいんだけどどっちいけばいい？」

「おっけ、私たちが案内したげる」

これをいったのはシャイネではない

「セララ？起きてたの？」

「ついさっきね」

セララつつーのかあのロングソード使い

まったく戦ってなかったなこいつ

「今失礼な事考えなかった？」

「気のせい気のせい」

そんなやり取りをしているうちに魔術師の女性（名前はリルルと言  
うらしい）も目を覚ます

誤解を解くのに30分

まあそんな訳で俺は彼女たちの案内で森を出る事になった

報酬はさっき倒したウォーウルフの素材

どうやら彼女らはギルドというのに所属しているらしい

俺の所属している魔術ギルドとは違うものだ

俺の所属しているギルドは魔術師が集まった魔術結社のようなものである

こちらで言うギルドは傭兵ギルド

依頼を受けそれを達成し報酬を貰うという物だ

入会は無料、ギルドカードという物が貰えそれは紛失した場合再発行に金貨一枚

この世界の通過は石貨、銅貨、銀貨、金貨、白金貨となっている

1000円、10000円、1万円、10万円、100万円といった具合だろうか

国民の年収が大体白金貨2〜3枚だそうだからこのくらいだろう

つまりギルドカードを再発行するだけで10万もするのだ

なくさないように注意しなければいけないだろう

まあ滅多になくす人は居ないらしいが

高い理由というのもちゃんとあり、ドラゴンの攻撃でも傷一つ付かないほど丈夫だからという事らしい

## 閑話

つまり彼女らはギルドの仕事でさっきの大量発生したウォーウルフの討伐に来た所

たった一人でそのウォーウルフで死体の山を築きその上その死体を一瞬で消したのを見て警戒していたらしい

魔術師であるリルルはその魔法に大変興味を持っていた

とはいえ教えるわけにもいかないので適当にはぐらかした

森を出るまで3日はかかるらしいorz

とりあえずしばらくはこの人たちについていく他無さそうだ

## 異世界に行った転生者の魔術師（後書き）

というわけで3話目でした

そうそう、主人公の仮イラストをみてみんなに載せました

でもなんかうまく描けていないというか中学生らしくないのでそのうち描き直します

それじゃまた次回！

## 番外 その頃の鷹峰（前書き）

ちよつと鷹峰サイドの方もやっておこうと思います

今後もちよくちよく番外編みたいな感じで入れていこうと思っています

それではごーぞ

## 番外 その頃の鷹峰

ここは何処だ

回りにあるのは大理石の壁や柱

それと地面に魔法陣、真ん中には台座が置いてあり台座には大きな宝石のような物がある

私は確か小鳩と召喚魔術とやらで・・・そうだ小鳩

・・・居ない

どうやら離れ離れになったようだ

「キヤアアアアアアア！」

突然悲鳴が響いた

「誰だ？」

「あ、あのあのあなんで血まみれなんですか勇者さま!？」

血まみれ? ああ、ここに来る前にヤクザと殴り合い(殺し合い?)  
した時のヤクザの返り血か

「ここに連れてこられる前にちよっと喧嘩してな」

「喧嘩!?! 喧嘩で血塗れ・・・って大丈夫なんですか!?!」

「全て返り血だ。というか君は誰なんだ？」

「返り血って・・・ハッ！申し訳ありません取り乱しました・・・」  
そりゃまあやって来た勇者さまとやらが血塗れだったら取り乱すだ  
ろう

口には出さないでおいた

小鳩が居ればさっさと返り血を消せたんだけどな

まああいつは私と違って魔術が使えるから問題ないだろう

私も覚えたかったが・・・

『あなた勉強やスポーツの才能はあっても魔術の才能は壊滅的ね』  
と小鳩が所属している魔術師ギルドの少女にそう言われた

まず魔術言語がどう足掻いても聞き取れないし

魔力も一般人が100だとすると私は0.001も無いそうだ

これではどんなに足掻いても消しカスすら浮かせられない  
いや消しカス程度ならいけるか・・・？

「私は・・・2・・・目巫女、・・・です」

あ、なんか名乗ってた

「あ、すまんもう一回言ってくれ」

考え事してて全然聞き取れなかった

「聞いてなかったんですか！？分かりました。私はこのアルカイドの24代目巫女、ヒイロと言います」

ヒイロ？日本人だか外国人だか分からない名前だな

というか巫女って外人にも居るのか

あ、ここ異世界だったっけ

「うん、私は鷹峰翠、まだ中2の私に勇者なんて出来るかどうか分からないが・・・」

「大丈夫です！過去の勇者様は皆魔力が高く魔王をもしのぐほどだったとか！」

そうか・・・為るほど、つまり私は巻き込まれたわけだな

そして巻き込んだ本人は別の場所に召喚されたと

一瞬殺意が沸いたが小鳩の不幸属性を考えると森の中でいきなり狼1000匹に囲まれている図が簡単に想像できた為むしろ同情しなくなった

「ご期待に添えなくてすまないが私に魔力は無いぞ」

「なんで分かるんですか？」

「確認した事があるからな・・・」

「過去の勇者さまは魔法の存在の無い世界から来たはずなんですが・・・」

「表向きにはな。私の幼馴染がすごい魔術師だった。多分この世界のどこか・・・そうだな、多分森の中で狼にでも囲まれていると思うんだが・・・」

「???なに言ってるか・・・」

「気にしないでくれ。最後の一言はただの独り言だ」

うーん・・・さっきの言葉聞いた後だと魔力が無いと分かった途端城から追い出されそうだ

結果、その心配も無く私は勇者としての役に付く事になった

一週間後には旅に出なければいけないらしいが

「体のいい厄介払いみたいだな」

「なにか仰いましたか？勇者さま」

「いや、何も」

私の独り言に反応したのはこの世界で私の世話役に任命されたメイドさん

名前は教えて貰っていない

曰く

『私めはメイドでございます。メイドに名前は必要ありません。気軽にメイドさんとお呼び下さい』

だそうだ

一瞬なんだこの人と思ったのは秘密である

ふむ・・・それにしても本当に隙が無いなこの人

なんでメイドさんなんてやっているのだろうと何度か思った

魔力も高いようだし

魔術に触れていれば魔術の才が無くても魔力を感知する程度の事は出来る

というか使えないからそれだけ教えて貰った

あれは才能が無くても出来るらしい

「この世界の事はもう分かりましたでしょうか」

「まあね。とりあえず現在の状況とかこの世界の常識、法律、マナー、文字、それに一番大事な勇者としてやる事、大体のことは覚えただ」

「頭の回転が速いお方ですね。過去の勇者はそれらを覚えるのに1週間徹夜したというのに」

なんで知ってるんだろう

何百年も前の事のはずなのに

ちなみに本来この一週間は訓練に使う

・・・のだが先ほど訓練の前に実力を知りたいとここの将軍が手合

わせを願って来たので適当に相手したら簡単に倒せてしまった

この国の将軍があれでは将来が不安になるな・・・

『お前が強すぎるんだよツ！！ by小鳩』

なにか良く分からない電波を受信したが気にしない事にしよう

まあ私は旅の途中で小鳩を見つけたらさっさと魔王を倒して帰るつもりだが

この世界に帰る方法が無くても私にはある

「魔王退治までの期限は約1年、時間は十分だな」

私は今読んでいた本をバンと勢い良く閉じた

後ろのメイドさんは私の言った言葉の意味が良く分からないという  
ような顔を一瞬だけしたがすぐにいつもの顔に戻った

手元には白金貨が10枚

出発は6日後

それまで城下町で武器の調達と行こうか

魔法剣か・・・私は魔力が無いし使えないな絶対

ちなみに価格は金貨2枚

「うーん・・・」

出来れば刀とかが望ましい

でもここは異世界で世界観的には中世ヨーロッパっぽい

刀なんてまず無いだろう

となると剣

でもここで扱っているのはなぜかほとんどが魔法剣

私にはまず扱えないだろう

なら斧？ハンマー？どれも使えない

使った事ない物を使うよりは使い慣れている物の方がいいはず

メリケンサック無いかな・・・

弓・・・弓道はほんの少しかじった事がある

いや駄目か

魔力が無い以上弓じゃ魔獣なんて倒せない

登山用スパイクとかあればいいのにな

あれなら靴底が立派な凶器に・・・ハッ！何を考えているんだ私は

「お嬢ちゃん商品が決まらないのかい？」

「ん？」

ふと、店員さんに話かけられた

なんだか見覚えがある店員のような気がするがきつと気のせいだろう

そもそもあの人はもうちょっと髪が黒い

この人は既に真っ白だ

「穰ちゃんにはこうというのが良いんじゃないかい？」

そう言っつて差し出して来たのは

刀だった

「なっ・・・!？」

吃驚してつい変な声を上げてしまう

「おや？違っつたかな？でも穰ちゃんはこうというのがいいと思うんだけどなあ」

鬱陶しいくらいに刀を薦めてきた

というか鬱陶しい

確かに刀なら私にとってはかなり使いやすい武器だ

剣道をいくらかやっていたし

だけどなぜ異世界の店員が私に刀が扱える事を知っている？

良く見て見ればあの人に似ている

もしかしてこの人

「なんでここに居るんですか？氷川さん」

「ちい、やっぱりバレちまったか」

予想通りだった

途端に白かった髪が黒く染まっっていく

目の色も青から黒に

懐からバンダナを取り出し額に巻く

そして最後に煙管を啜え紫煙を吐き出す

この人は氷川茂

なんとも普通の名前だがこれでも小鳩に魔術を教えた人物

世界最強の魔術師と言われている程に魔術を極めている

「まあいいか。ホレ、アンタは刀の方が使いやすいだろっ?」

「まあそうですね」

私は氷川さんから刀を受け取る

少し抜いて見る

刃は赤くそして熱かった

触ったら危なそうだが自分で触る分にはあったかい程度で済むようだ

全て抜いて刀を地面に近づけて見ると地面が焦げた

「これって魔法剣じゃないですか？」

でも魔法剣なら使うのに魔力がいるはず

「いや、妖刀。名は焰龍<sup>えんりゆう</sup>」

曰く、この刀は龍の吐き出す焰を使って刀を打つたらしい

刀の鞘は赤ベースにオレンジの装飾

柄の部分も似たような感じだった

「そいつを扱うのに魔力は必要ない。龍の焰が宿ってるからな。それとこれを打った鍛冶屋の魂が聖霊になって籠ってる。これが最後の作品で最高傑作だったそうだ」

この刀は持ち主と決めた人間にしか抜けないらしい

「何時の間に認められたんだろうな。私は」

「さあな。ただ、期待に応えられないならそいつは持ち主でさえ焼き切るぞ」

「刀とはそう言うものでしょう」

「違えねえ」

最後にそう言って氷川さんはその場から消えた

ついでに店も

その場にはメモと人形だけが残されていた

『ちなみに俺の正体に気づかなかった場合は白金貨十枚で売るはずだったんだ。あてが外れたぜちくしょう』

というのがメモの内容

ふざけているのかあの人は・・・

「まあいつもふざけていたか」

あの氷川さんはどうやら人形だったらしい

私は焰龍を肩に掛けながら城に戻った

夜、夢を見た

「どこだここは」

辺り一面が焔に包まれている

だけど熱くない

この焔はもしかして

『こんばんわ』

女性の声が聞こえた

振り向くと真っ赤な着物とオレンジ色の焔のような羽衣に包まれた  
黒髪の女性が立っていた

すぐに誰なのか分かった

「この刀を打った人ですね？」

『その通り。さすが私が認めただけあるわね』

「雰囲気で分かったよ」

『そう、まあとりあえず今日は挨拶をしに来たの。私は焰龍の親みたいなものね。いえ、今は焰龍そのものかしら』

「でしようね」

「ここは焰龍が見せている夢か」

「一つ聞きたい」

『何かしら？』

「なんで持ち主に私を選んだんだ？」

『さあ？私も分からないわ？私が選んだんじゃないで焰龍が選んだもの』

「焰龍はあなたじゃないのか？」

『私よ。私と、この焰。この焰があなたを持ち主として選んだの』

焰にも意思があるのか

『当然よ。だってあなた今、焰に囲まれているのに熱く無いでしょう？もしもあなたと私以外の生き物がここに入れば即座に焼き殺されるわ』

でも

『あなたに焰龍を託した男、それとあなたの幼馴染なら焰龍も認めるかもしれないわね』

最後にその言葉を聞いて私は目を覚ました

## 番外 その頃の鷹峰（後書き）

なんか書いていけば書いているほど女に見えなくなってくる鷹峰

ちよつと長くなりましたが鷹峰サイドはたまにしかやらないのでこの機会にさっさと進めていかないと訳が分からなくなるので

鷹峰は魔術が使えません

勇者なのに魔法、魔術と言った類のものがまったく使えないです

それでも魔術で身体能力強化した小鳩よりも強いと

魔術使えば話は別ですが

それと小鳩の師匠登場！

氷川茂、滅茶苦茶普通な名前という事になっておりますが実力は普通じゃありません

力関係を整理してみましよう

魔力では

氷川 > 超えられない壁 > 三賢者（小鳩、???, ??） > > > 雀 >  
その他 > > > 絶対に超えられない壁 > > > > > 鷹峰

と言った具合

ちなみに総合ステータス

氷川 > 超えられない壁 > 三賢者 > 鷹峰 > その他 > > 雀

雀は魔術以外の才がまったく無いです

それ以外は一般並みかそれ以上程度にはあるのでこんな感じに

氷川は体力とかは上の下ですが魔術のテクや魔力などが桁違いすぎるためにこうなりました

あくまで総合ステータス、そこには魔術も含まれます

総合にすれば一気に差が縮まりましたがそれでも大して変わりはありません

鷹峰は今回登場した焰龍を持てば三賢者超えます

まあ力関係の話はこの辺にして

次回は本編です

それでは

## 11の世界の勇者の歴史（前書き）

連続投稿

サブタイトルを考えるのに10分かかった・・・

それじゃ1話間に入ったので改めて前回のあらすじ

異世界に召喚され電話をしていたらいきなり狼に襲われた

倒したと思ったら今度は女性3人に襲われた（性的な意味では無く）

そしたらなぜか女性三人に街まで案内されることになった

名前はシャイネとセララとリルルと言っらしい

## この世界の勇者の歴史

「あれ？先生じゃないですか。なんか用ですか？」

『いんやな、お前が異世界に召喚されたとか聞いて面白そうだと思つて電話したわけ』

「面白そうとか言わないでくださいよ・・・結構大変な感じなんですから」

『ギルド最強の魔術師の一角が何言つてやがる』

三賢者なんて称号欲しくて貰つたわけじゃないんだけど

夜中、3人が寝静まつた頃ポケットの携帯に連絡が入った

何かあつたのだろうかと見て見れば掛けてきたのは俺に魔術を教え  
た先生、氷川茂

普通の名前で普通の中年だがこれでも世界最強の魔術師の称号を持  
つオッサンである

魔術の腕は最高峰

次元移動どころか次元破壊、接合、創造まで軽くやつてのけること  
が出来る程の実力を持つているが既に引退した身なので今は長野の  
山奥で一人隠居生活をしている

「用が無いなら切りますよ」

『おいおいそんな事言うなよ。美女3人も引き連れて羨ましいぞコラ！感想聞かせろー！』

「なんで知ってんすか！！？さてはどっかから見てるんじゃない？」

『まあな。ついでお前の幼馴染、その世界で勇者やってるぞ。もう1週間前に旅に出てる。お前より2週間早くここについてたからな』

「たった1週間で！？」

「訓練もまともにやらせねーのかよここは・・・」

「あいつなら1週間でも十分だろうとは思っけどけど・・・魔王の實力が図れてないから実際は分からない」

「あいつ魔術の才能だけは本当に皆無だから」

『魔王ならお前でも十分に・・・とまではいかねーけどまあ何とかなるだろ。まあガンバレや、それとなく援護してやっから』

「そいじゃな、と言って先生は電話を切る」

「あ、ちょっと!？」

「ツーツーツーと言う音が為る」

「俺はため息を付きながら携帯をたたんだ」

「まったく・・・あのオッサンは・・・」

遠まわしに魔王倒せって言ってんじゃねーか

言いながら探査魔術を発動

近くに居るなら探知出来るはず

俺の探査魔術の効果範囲は1km

そのうち200m以内ならアリの気配でも探知出来る

「・・・・・・・・」

集中するが見つからない

相変わらず気配を消すのがうまいなあのおッサンは

「駄目だ・・・諦めよう」

寝袋に入って俺は眠りについた

「着いたわよ」

セララが目の前にある門を指差して言う

森を出た後せっつかくだから街まで案内してあげるといわれたので案内してもらった

そこにあるのは大きな門

左右には門番らしき人が大きな槍を持って佇んでいる

「ここはアルカイドという国です。最近では勇者を召喚した事で話題になってますね」

と言ったのはシャイネ

「為るほど・・・ありがとう」

「それじゃまた。縁があったら会いましょう」

とリルル

「ああ、それじゃまた」

そう言っつて俺とシャイネたちは別れた

アルカイドに入り今は国立図書館という場所に居る

情報収集の為だ

大体の事はシャルルたちに聞いているので問題は無いがやっぱりもう少し調べておきたい

それで分かった事はほとんど無かった

とりあえず勇者召喚というのはこれまでも何度かあったらしい

魔王が現れる度に勇者を召喚していると言っわけだ

一番古いのは700年前

時間の流れがこの世界と元の世界では違うらしく700年前の勇者は白い軍服を着た日本人だったようだ

700年前の勇者は一発で了承してくれたらしい

まあ見た感じ第二次世界大戦の真っ只中にこの世界に召喚されたっばいからな・・・

そりゃ何千人と殺すよりは1人殺してゆっくり生きたいもんだ

100年前の勇者は断ろうとしたらしい

絶対にやるもんかと

そりゃ無理やり連れてこられてやりたがるわけが無い

しかも先代はその前の潔く引き受けた勇者とたびたび比較されて大分不遇な扱いを受けたとか

まあなんやかんやで渋々旅に出て魔王を討伐したらしい

なぜか旅の道中不老不死の薬を飲まされ今でもどこかで生きている

ちなみに現在行方不明

探さないで下さいという書置きがあったとか何とか

多分どっかの山奥だか聖域だか秘境だかで暮してる

1人で

「先代不憫だな・・・」

元の世界で約10年前

つまり2004年か・・・先代が元の世界から消えたのは

ちなみに俺の居た時代は2014年

みら分かるか

とりあえず協力者が欲しいな・・・

でなきゃ鷹峰も探すに探せない

まあ適当に旅してごうか

出来れば先代にも会ってみたい

それと帰る前についてと言っちゃ何だけど魔王退治くらいやってや  
ろう

「夏休み終わる前に帰れるかな・・・？」

夏休み終わる前後を目標にすると約1年ぐらいの猶予があるな

なんとかなるだろ

## この世界の勇者の歴史（後書き）

はい、師匠連続登場

ついでに先代登場フラグ

出すつもりですが実際に出るかどうかは分かりません

出来れば出したいですね

大体設定は決まっているので

3パターンぐらいあるけど

どれが出るかは未定です

それじゃまた次回！

**ギルドに登録、護衛依頼、ドラゴン（前書き）**

サブタイトルは気にしないで下さい

前回のあらすじ

アルカイドの国立図書館でこの世界の歴史を調べたら先代の勇者が  
今なおその時の姿のままに生きている事が分かった

ところで俺に固定パーティが出来る日は来るのだろうか

## ギルドに登録、護衛依頼、ドラゴン

協力者探しと言えばギルド

という安易な理由で俺はギルドに登録した

Fランクからスタート

ぶっちゃけ魔術師ギルドの同僚呼んでもいいんだけどどうせならこの世界の事を良く知る人間の方がいい

さらに出来る事なら先代勇者とかだと最高なんだけど世界の何処から何処にいるかも分からないような人間を探すなんて不可能にも近いので諦める

それを言うなら鷹峰はどうかと思うだろうけど鷹峰の場合魔王のいる魔界に向かえばまず会えるだろうから問題ない

早速仲間探しと言いたいところだけれど

「とはいえいきなり仲間が出来るわけ無いよな・・・」

一緒に旅してくれる人がいると心強いんだけど・・・

寂しがりやの俺に一人旅は困難なんですよつと

兎並みだぞこのヤロー

過去に行った異世界でも最初の目標は協力者探しだったような気が

する

移転先が城の中だった時はさっさと仲間が決まったけど

場合によっては森の中・・・なんて事もあった

まさに今回のケースが後者だろう

まあ今回の場合じゃあ帰ろうという事が出来ないという初めてのケースなんだけど

「誰かと思えばこの間の魔術師君じゃない」

「は？」

なんとなく聞き覚えのある声に振り返って見るとセララが立っていた

「あ、この間はお世話になりました」

「何？ギルドに登録したの？」

「はい」

「それじゃあさ、私これから馬車の護衛依頼受けるんだけど一緒に行かない？」

護衛依頼か・・・

為るほど、それなら次の街まで一気に行けるし金も稼げて一石二鳥

良く考えて見れば今の俺には金が無い

食料は時々魔術ギルドの方から支給して貰ってるから特に困っては無いけどやっぱり宿に止まればそれ以上に越した事は無いしこの世界のものも食べてみたい（むしろこっちが本音）

というわけで俺は二つ返事で了承した

「遅いぞ〜ツバサ〜」

「すみません」

昨日はギルドの宿舎に泊まった

ギルドはギルド登録者に宿を無料で貸し出しているのだ

主にDランクぐらいまでの人が多い

理由としてはまだ成り立てな為金が無いと言う人が多くそのせいで宿が借りられない人がたくさんいるのである

Cランク異常の奴らは簡単に金貨4〜5枚は1日で稼げる為、ギルドの宿舎を借りる必要はあまり無い

ベッドしかないギルドの宿舎を使うよりはたかが胴貨2〜3枚で借りられる街の宿を使ったほうがいいから

SSランクともなると白金貨数十〜数百枚は軽く稼ぐ

それだけ難易度の高い仕事が多い

とはいえSSランクは今の所ほんの数人しか居ないので報酬の払いすぎで国がつぶれるなんて事は無い

そもそもそこまでいく前に一生遊んで暮せる位の金が溜まってしま  
うのでSSランクの人間はほとんど仕事する必要が無いのだ  
SSランク⇨引退という方程式が出来ているぐらい

まあSS級の依頼も滅多に無いので仕事が無いとも言えるが

閑話

今回の依頼は先日も言ったが馬車の護衛だ

依頼主はどっかの貴族でこれからポラリスという国に向かうのでそ

これまでの道中護衛に付けとの事だ

ちなみに俺達ギルドの人間は一番前と後ろ

2番目3番目と馬車に近いほど信頼されている部下が置かれている

最前線の俺達は一番死ぬ可能性が高い

「なんかな〜・・・こういう日に限って俺の不幸補正が働きそうだ・・・」

馬に乗って馬車のペースに合わせて走る

馬に乗るのは今までも異世界に言った経験があるので慣れてるので簡単に操れる

「はいよーケロちゃん」

セララが乗っているのはどう見ても馬じゃないが・・・

カエルだよねあれどう見ても

ただしカエル独特のぬめりなんかは無いしむしろ哺乳類のように毛が生えているが・・・

カエルの皮膚に犬の毛皮を貼り付けたような感じ

目とかは完全にカエルだし虫(1mぐらいあるデカイ蚊)を長い舌で掴み取って喰ってるけど

この世界のカエルはあくまで哺乳類だそうです

どうなってるんだ一体・・・

ちなみにあのカエルの名前はライダーフロツグ

乗り物として扱われる為こんな名前がついた

目の上にある乗るときに掴みやすそうな角が特徴

最早カエルじゃない

ちなみにスピードは最大で時速80kmは出るそう

人懐っこく手軽にペットや愛馬、もとい愛蛙に出来る

毛皮はさわり心地が良かったため死んだ後は毛皮だけ剥ぎ取って毛布やコートなんかに使われるらしい

その日の旅はおかしいくらいあっさりと終わった

盗賊の類も出ず魔獣も出ない

俺の不幸補正がある割には珍しい

## 2日目

早朝にテントをたたみポラリスを目指して出発した

今更だけどこの世界の国って星の名前多いな・・・

「今日も何も出てこないと良いわね」

「どーだか・・・」

不幸補正がある以上天文学的数値と言っていいだろう

セララに幸運補正がついてるなら話は別だけど

まあ悪い事じゃないからいいか

そのまま馬車は進んでいく

それについて俺が乗っている馬も走る

一応『本』も手に持っている

「ん？」

馬車が急に止まった

当然その原因を見ている俺も止まる

まあ予想はしていたさ

俺の不幸補正がある時点で何も出ないなんて事はありえないだろうと  
でもさあ

「ドラゴンはないよね」

そこに居たのは体長20mは軽く超えるサイズのドラゴン

道を塞ぐように寝転んでいる

眠って居るらしい

「為るほど・・・それで魔獣が出なかったわけか」

皆ビビッて逃げたらしい

魔獣も含めて

それが例え寝ている竜でも絶対に手を出す奴は居ない

竜種は魔獣とは違う

基本的に魔王の手下とかでは無いし人の前に姿を現すことも滅多に  
無い

だから人を襲う事も無いが

時々本当にごく稀に、主に発情期や産卵期、又は子持ちでまだ親離れしていない子竜が居る場合に人に被害をもたらす事がある

人が住む範囲内に出てくる竜はなぜかそういう状況のものばかりなので竜に出会ったら一目散に逃げるといわれているそうだなんで発情期や産卵期になったら人里に下りてくるのだろう

はた迷惑な種族だ

竜を狩れるのはSランク以上

このサイズならSランクの中でもかなり上の部類になる

ちなみにワイバーンは竜の亜種で魔獣扱い

その為Bランクぐらいになれば下級のワイバーンぐらいなら狩れる

「回り道した方がいいか？」

竜はこつちから手出ししなければ何もしてこない

「あんなんでそんなに落ち着いてんのよ・・・」

前にも言ったが俺はドラゴンなんて片手で殺せる（もちろん魔術使用）

とはいえ回りに入る被害が甚大なのであまり戦いたくは無い

主に俺の魔術で

S級の竜を狩れるとしたら中級魔術が数発、上級魔術が1発と言ったところだろう

白と黒の魔道書があれば簡単に放てる物なので問題ない

禁忌魔術はちょっと手間が掛かるけどSS級の竜種でも1発で殺せる

どれも片手で撃てるか撃てないかぐらい

「そうだな。回り道した方がいいだろう」

そう言ったのは今回の護衛対象が最も信頼しているスラム隊長

中に居るのってもしかして王族かなんか？

そんな訳で今回は竜を回り道して回避という事になった

「残念じゃないよ？こんな場所で竜と魔術で戦ったりしたらここら帯砂漠化する」

「なんで追われてるんだ俺ら」

「分かるわけないでしょッ！？なんでアンタはそんなに落ち着いてられるわけ！？」

現在ドラゴンから全力で逃走中

馬車についてる馬も頑張って走っております

さっきまで寝ていたドラゴンは最後尾の俺と近づいた途端に目を覚ました

どうやら俺の魔力に反応したらしい

正確には俺の魔道書の魔力

白と黒の魔道書

魔術師ギルドの図書館の魔道書コーナー（関係者以外閲覧禁止）の奥に札や鎖、杭といった封印具で封印されていた魔道書

まだ小4と幼かった俺はついつい鎖に触れてしまいその途端に鎖が砕けた

おかしいなあ・・・俺は幻想殺しなんて便利な物持っていないのに

後に聞いた話だと奥の方に封印されていた為そういう魔道書があった事を忘れていたらしい

その為ずっと放置されていた封印がほろびそれが俺が触れた事によって俺のコントロールが未熟な魔力と本の魔力が共鳴して封印が壊れたとか

偶々俺が適合者として問題なかったから良かった物のもし駄目だったら俺の全身の血が逆流してあまりの情報量に脳がパンクしていたと思う

実際3日ぐらい高熱にうなされたし

その3日後に流行ってたインフルにかかるといふ不幸っぷり

よく死ななかつたなあ俺

まあそんな訳で俺はこの白と黒の魔道書の持ち主になったわけだけど

それが原因で20m級のドラゴンと戦う事になるとは

ドラゴンが焔を吹く

焔は俺達目掛けて辺りを焼き尽くしながら迫ってきた

「キヤアアアアアア」

「うわあああああああ」

セララと護衛の何人かが悲鳴を上げる

「

」

目の前に魔法陣が3つ展開され魔法陣から破壊光線のような物が放たれる

それはドラゴンの焰を吹き飛ばし空を貫いた

「外したか・・・じゃあ次は」

魔道書を開き魔道書に描かれている魔法陣の上に手をかざす

「

」

今までとは違う魔術言語

魔道書を使う場合少し違う言語を使う必要がある

どちらにせよ普通の人間には聞き取れないようになっていくけれど、魔道書に使うのは本人以外には絶対に聞き取れない

通常のものなら魔術をかじっていれば聞き取れる

聞き取った魔術をそのまま自分の物にするような奴もいるくらいだし

空に魔法陣が展開される

そこから更に魔術言語で詠唱を紡ぐ

「  
」

ズガンと轟音が鳴り響く

ドラゴンがうめき声を上げた

ズガンズガンと再び鳴りそれが44回続く

止めに巨大な雷の柱がドラゴンを貫いた

断末魔が鳴り響きドラゴンが倒れた

「ちょっと時間かかったな・・・」

やっぱり久々だからだろうか

ドラゴンとやったのは中1以来である

「な、ななな、なな」

セララが倒れたドラゴンを指差しながら変な声を上げる

他の護衛も似たような感じ

「馬車は大丈夫ですか？」

「え、あ、ああ、え？」

スラム隊長・・・の横に立っている護衛その2

副隊長のリッタという女性だ

その人に馬車の状態を聞いたが中々応えが帰ってこない

どうやら驚愕のあまり固まってしまったようだ

(さすがに上級の複合詠唱はやりすぎたか)

雷属性の上級魔術

その中でも魔道書の魔術言語に一般の魔術言語、そしてオリジナルの魔術言語を加える事で威力を限界まで高めた物を複合詠唱

これはやり方次第で威力は上がるがやり方次第で威力は下がる

一般的に一般で使われている魔術言語は簡単な物な代わり魔道書の言語と比べかなり威力が落ちる

そしてオリジナルの言語は本人にしか扱えない魔術を創る為の物で効果は未知数

中には次元創造魔術なんてとんでもない物を創ってしまう奴もいる

というかうちの先生である

俺も多少は使えるので今回使ってみた

「ああ、馬車は無事だ」

スラム隊長が代わりに答えた

その目は警戒心でいっぱいだった

こりゃ今後の旅はギスギスしそうだ

どうせ明日で終わりだけど

**ギルドに登録、護衛依頼、ドラゴン（後書き）**

ドラゴン登場、そして瞬殺

さて、いつになったら主人公に固定の仲間が出来るのだろうか

セララは時々登場すれど別に主人公パーティに入るわけではありません  
せん

今の所その予定は無し

それじゃまた次回

## ポラリスは寒い（前書き）

早くもストックが切れたぜ！

まあ最初からそんなにたくさんストックを作っては居なかったの  
少し更新ペースを遅らせながらゆっくりと次話以降も書いていこう  
と思つてます

いい加減他の小説の更新とか新作のストックとか（またかよ）書い  
てかないと

思いついて書き始めては詰まって削除して書き直すという感じで進  
んでいる新作のストックがいくつもあります

適当にチヨイスするとしたら「異世界逆トリップ（連載版）」です  
かね

これが一番連載したい作品の一つだったりします

以前書いた短編の連載版です

良かったら見てください

それじゃ前書きがちょっと長くなって来たところで前回のあらすじ

ギルドに登録したらセララと会った

護衛依頼を一緒に受けようと誘われたので受けてみれば道中ドラゴ  
ンと遭遇

避けてこうと思ったたらドラゴンが俺の魔力に反応し目を覚ました

仕方が無いので魔術を使って討伐した

そしたら警戒されました

ギスギスした雰囲気は苦手なんだけどな・・・

ポラリスは寒い

ポラリスに着いた

ギスギスとした雰囲気からようやく開放される

成功報酬として金貨4枚、そしてドラゴン討伐の際手に入れた素材で白金貨5枚

初クエストでいきなり白金貨5枚と金貨4枚というAランク並みの報酬に

ちなみに今回ドラゴンを倒した件で俺のランクはFから一気にBまで上がった

Sを倒してもB以上までは上がらない

ギルドの規則である

ポラリスはその名の通り（北極星だし）北の方にある国だ

その為、夏でもちよつと肌寒い

俺の格好は1学期の終業式の帰りの時のまま

つまり夏服、半そでである

しかも生地が薄い

今まで新しい服を買おうにも金が無かった

「さすがにこの服じゃ寒いよなあ・・・」

魔術師ギルドから服も支給して貰えば良かったけど今頼んだところで3日は掛かる

俺と鷹峰がやってくる時間に2週間の時差があったように物資の支給にも時差が出る可能性がある

それにこの世界で売っている服を買った方が周りから浮かなくて済むというのも理由の一つである

実際学ランで異世界の街中を歩いたら周りからじろじろ見られるという事があった

だから俺は異世界に行く度に新しい服を買っている

そのせいで俺のロッカーはコスプレ用みたいな服でいっぱいだった

一度友人に見られて『お前オタクなのか？それともコスプレイヤー？』と聞かれた事がある

殴って忘れさせた（魔術使用アリで）

そんな訳で防具・服屋である

色々な服や防具が売っていた

「もうギルドじゃ魔術師って事で通ってるしな・・・」

魔術師の服の方がいいかもしれない

でも別に格闘とかが出来ないわけではない

少なくともそこらのヤーさんやマフィアぐらいならどうにでも出来る

小学校1年生からそういうのに追われ続けた男の体力なめたらあかんぜ

そんな訳で適当に服を選び購入

上が黒で下が白

靴は黒いブーツ

最後に白いマントと言つべきかローブと言つべきかまあそんな感じの物を

ちなみにローブは魔力をちょっとこめれば熱が籠り防寒として使えるそうだ

この寒い街ではそういうのが売れるらしい

半そでの服は肌着以外一つも売っていない

なのにビキニアーマーとか普通に売られているのはなぜだろう

「長袖の上から着んのかな」

適当にそう結論付け店を出た

武器は刃渡り30cm程度のナイフを適当に一本

良い切れ味！とても丈夫！そして軽い！とかそんな広告があったが  
後ろには同じ物がずらり

量産品じゃねーかと思いつつ一本購入

こんな世界でどうやって量産してるんだろう・・・

多分明治時代ぐらいの技術はあるのだろうと適当に結論付けた

魔術師なら杖でも持っておかないと不自然だろうか・・・

前にあつたりルルって魔術師も杖持ってたし

道行く人の中にも魔術師らしき人は何人か居るが皆杖を持っていた

「……………」

10分ほど考えた後、1m半ほどの長さの黒い杖を一本購入した

同じく量産品

同じ物が箱に無造作に突っ込まれている

必要ないけどこの世界に溶け込む為にはあつた方がいいだろう

さっきも言ったが俺はギルドでは既に魔術師として通ってしまっている

ドラゴンをフランクが倒したという事もあつて名前も大分知られてしまった

ギルドに着いた辺りで「あれ？やっぱいらなくね？杖」とセララたちが何も言わなかったのを思い出したけどもう遅いので持つておく事にした

何かと役立つかもしれない

例えばリーチの短い相手を押さえつけるとか

長い物の使い方がそれしか思いつかないのは問題だと思っけど性格故に仕方が無い

ギルドの宿舎を借りベッドに転がる

「4人部屋かよ」

今の所俺一人だがベッドが4つあるところを見ると後々3人来るかもしれない

個人的に今日は一人で寝たい気分

まあいつか

そういうのも異世界で慣れている

一度、この世界と同じようなシステムでギルドの宿舎がある世界に行った事がある

その時は俺があとで相部屋で良いかと言われ部屋に入ってみれば女性3人が居た

男性は一人も居らず

その時はまだ小4と子供だった為女性と同じ部屋にしても問題ないと思われたのだろうか

身長も139cmと低かった

散々からかわれたのは今となってはいい思い出・・・と思いたい

白と黒の魔道書を手にして間もない頃の冬休みであった

「まあ今は俺も子供じゃないしそういう事はもう無いだろ」

あったらこの世界のルールはどうなってるんだと疑うぞ

まあ当然そんな事は

なくも無かった

「あれ？この間の・・・」

「久しぶりね」

シャイネとリルルがやって来た

この世界は男女平等なのだろうか

それにしてもやりすぎだろうに

最近の世の中は女性専用車両とか女性のみ割引とか女尊男卑気味になっ  
ていたような気がするけれど・・・

この世界ではまったく同じ扱いらしい

まあさすがに温泉なんかは女湯男湯に分かれてたけど

その辺は前に宿舎に泊まったとき確認済み

混浴もあつたけどね

チキンの俺に結構美人の多いギルドの混浴に行く勇氣はありません

行きたかつたけどさ

これでも思春期だし

「あー・・・久しぶり」

苦笑と言つかなんというか

呆れとか色々と混じつたような表情だつたと思うこのときの俺は

彼女らの瞳にうつつた俺の顔は確かにそんな顔だつたように見えた

数時間後、もう一人やってきた

銀髪に赤い目の美青年

「相部屋の方でしょうか？一応自己紹介しときますね？マルク・ヴ

アーンと言います。一応ランクはBです」

開口一番そんな事を言ってきたマルクという男性

大剣を持っているところを見ると見かけによらず力は強いのかも  
れない

耳には猫耳が生えていた

猫耳？

やっぱりここにも獣人と言うのは存在するらしい

っーか猫耳の『男』って誰得だよ

あゝでも若干女顔っぽいし多少は需要あるのかな

腐女子とか？

少なくとも俺得にはならないんだろうな〜と思いつつ自己紹介をする

聞き覚えの無い名前にマルクは尻尾をゆらゆらさせながらどうもと  
言ってくる

Bランク以上の人間は大体顔が知れているものだ

シャイネとリルルも名乗った

ランクはAだそうだ

意外

AランクやBランクは基本宿屋だと思っただけど

案外未だに宿舎を使う人も居るらしい

節約家とか

自己紹介を終えたところで全員・・・布団を被って寝た

やる事も無いしね

ただのマナーみたいなものである byマルク

ちなみにシャイネとセララ、リルルの三人は別にチームを組んでい  
るわけではなくあの時偶々同じクエストを受けて分かれてなんだか  
らで偶々同じ街にたどり着き偶々シャイネとリルルは同じ部屋に  
なったというだけだった

どんな偶然だよと思いはしたが海外に引越した先で小学校の時の  
同級生と出会ったなんて話があるくらいだから別にさほどすごい事  
でも無いのかも知れない

後々聞いた話だがこの街で来週から闘技大会とやらをやるそうだ

それでいろんな地域から人が集まっているらしい

ちなみに参加条件ランクD以上

既に参加受付は今日の昼で締め切っている為俺は出れない

せっかくだから観客として見守らせていただこうと思いつながら俺は  
眠りについた

## ポラリスは寒い（後書き）

なんか最後の方滅茶苦茶だったような気がしないでもない

次回の更新は少し遅れる予定です

多分一週間後ぐらい？

テストが来週から始まるので

留年なんてしたくない！

別にするほど頭が悪いわけじゃないと思うけど実際どうなるかは不明

それではまた次回！

カタヌキ(前書き)

更新遅くなりました

すみませんでした

## カタヌキ

ポラリスの闘技大会は街の真ん中に建っている城の中にある闘技場で行われる

その闘技場は普段は兵士の訓練場として扱われているのだが1年に1度、闘技大会の時期のみ開放される

当然、城の中もついでに色々見れるらしい

一部を除いて開放される

そんな訳で城の中はとても賑わっており

街の入り口から城の門に続く一本の大きな道には露店がたくさん出ていた

俺はその露店でたこ焼きらしき何かとホットドッグらしき何かを食べていた

「見た事もない食べ物ばかりだぜイエイ」

こういうお祭り事は大好きである

露店には食べ物だけでなく射的やかたぬきまであった

最早、闘技大会などではなくただのお祭りである

ちなみにこれらの店は過去に来た勇者が伝えた物らしいが詳しくは

知らない

闘技大会などついでと言わんばかりに露店は賑わっていた

道は日本の大通りぐらい広くしかも車が通らないのでかなり広いがそれでもかなり混んでいた

日本の満員電車やコミケよりはマシだけど

「アンタ、さあ、なんで、こんな、人混みで、普通に・・・動けんのよッ！」

なぜか一緒に付いてきたセララが人混みの中でもみくちやにされながら聞いてきた

なぜかって

「前の世界じゃ日常茶飯事だ」

一応都会育ちです

前世では

高校も電車だったし

×××××だったころの友人も知り合いも両親も名前は思い出せないけどまあ元気でやっていると思いたい

両親はもう逝っちゃってるかもしれないけど

「考えても何も感じないのはやっぱり前世だからかなあ・・・」

小さく呟きながら俺は先へ進む

目指すはかたぬき

俺のかたぬきテクニクを舐めるなッ！

「失敗した・・・」

なんだこのかたぬきの難易度

魔術で細工してあるんじゃない・・・んなわけな

あつたよ

なんて卑怯なんだこのオッチャン

「こんちくしょおおおおおおお！」

バンツと隣のオッサンがかたぬきの残骸を叩き付ける

どんな勢いで叩きつけたらこんな轟音が鳴り響くのかぜひ聞きたいところだけれど聞いた瞬間八つ当たりされそうだから止めた

滅茶苦茶機嫌悪そうだ

「まあ・・・魔術で細工されてたら成功する訳ないよな・・・」

言いながら新しくもう10枚買う

そして

「」

魔術言語、魔術の細工を解く

さあ俺のテクを見るがいい

「失敗した」

まさか画鋏にまで細工してあるとは

成功しようがねーだろコレ

いいつつ俺は残った7枚の魔術細工を解きさらに画鋏の細工も解く

最初に手を付けたのは昇り龍

いきなり最高難易度のかたぬき

5分で半分を削り終えた

「スゲエ！あの小僧・・・こんな短時間であそこまで終わらせやがった・・・ッ！」

「ここのかたぬきはどんな簡単な物でも成功しないといわれているのにッ！」

野次から声が聞こえてくる

完成まであと2割と言う所で周りのギャラリーの声が大きくなり

ぶっちゃけうるさい

集中できんだらうが

そのまま残り2割も削り終わり、ようやく終了した

完成までかかった時間は15分

「過去最短・・・記録達成ッ！」

ちなみに前回やった時は17分かかった

その前は17分32秒

毎回数えています

その後残り6枚のかたぬきも終了させ景品を貰う

そろそろ闘技大会も準決勝ぐらいまで進んでいるだろうと思う

今の所俺が賭けた奴は勝ち残っているらしい

賭けた奴が負けると券が破れる仕組みとなっている

さすが魔術の世界

俺の世界の魔術より劣っているが生活の中心となって回っている分  
こう言う魔術に関しては無駄に凄い

「そのまま決勝まで行ってくれよ？」

ちなみに俺が賭けたのはトルネ・リエンと言う青年で今回初出場だ  
そうだ

ランクはA

竜人と呼ばれる種族で目が赤く角が生えている

それ以外は普通の人間と変わらない

この世界にいるのは何も人間だけではない

エルフとかドワーフとか獣人とか魚人とか色々居る

その中に竜人と呼ばれる種族が居る

別に竜に変身出来る訳でも無いし単純に竜の名残がある種族

竜とは別種で信仰してる訳でも無いのであしからず

まあ話す力はあるらしいけど高位の竜ともなれば普通に話せる竜も居るし

特に人間と変わったところは無い

ただ竜の息吹と呼ばれる竜特有の魔術が使えるらしい

アレは詠唱の必要が無く体内の魔力をそのまま炎や雷、吹雪などに変換して体外に放出する魔術

その為、俺の魔術よりも使いやすさは上である

ただその分攻撃が単調になるんだけど

そこは威力でカバー

「ツ、バ、サア・・・」

「うおっ・・・」

人混みの中から女の人の手がこっちに向かって伸びてきた  
引っ張り出すとセララだった

「置いてくアアアア!!」

少し深呼吸して俺の水筒を奪い水を一口飲むと同時に叫ぶ

ああ、そっぴや居たね君

「忘れてたの!？」

「サーセン」

「許さん」

「すみません」

「許さぬ」

剣を向けてきた

「ゴメンなさい」

頭を下げる

「うん、許す」

許された

「クラブプロブスターサンド奢ってくれたらね」

「あれ高いじゃん」

ちなみに1つ金貨一枚

高いなんてもんじゃない

日本円に換算して約10万円

詳しくは知らないけど年収が白金貨4〜5枚だから大体あってる筈

あれ、前にも言ったか

「置いてった罰」

「勝手についてきたんじゃない」

「いいじゃん。私チーム組んでないから仲良くしといた方が得だよ？アンタまだこの世界来たばかりかでしょ？じゃあ右も左も分からないんじゃない？」

ビンゴ

でなければ協力者探しなんてしない

「でも一応、俺の目的って魔王退治も兼ねてるんだけど」

「短い付き合いだった」

「エエ!？」

「冗談よ。私がこの世界の案内したげる」

想定外予想外

なんやかんやで俺は協力者を見つけた

ちなみにトルネは決勝で敗北した

カタヌキ（後書き）

ようやく協力者が出来ました

ちよつと強引だったかもしれない

3人娘の誰をチョイスしようかと少し悩んだところでした

全員は面倒なので却下

だって口調似てんだもん

魔術師で被るし

期末近いのでまた遅くなるかもしれませんがまた次回

## 十二支ダンジョン（前書き）

試験が終わったのにもうあと一週間で期末です

なんてこった

勉強まったくしてませんが前回も大丈夫だったから今回も大丈夫

だと思ってる痛い目みるので頑張ります

それじゃどーぞ

## 十二支ダンジョン

「どうしてこうなった・・・？」

旅の仲間にセララが加わって1週間

今、俺は薄暗い地下のダンジョンに居る

当然好きで入った訳ではなく落とし穴っぽいトラップに引っかかって落ちた

途中で光の中に飛び込んだという事を考えると恐らくそのまま地下に落ちたのではなく次元移動のような魔法でここに来させられたのだろう

地下だと分かったのは天井や壁に木の根っこが張っているからだ

天井のところどころから水が大量に流れ出ている

地面は足首まで水に浸かっていた

上に湖でもあるのだろうか

いつか沈むのではとか一瞬不安になったが地面はヒビだらけでそこに水が流れて行っているようなので大丈夫・・・だと思っ多分

とりあえず既に1時間近く彷徨っているけどあれだけの水が流れているにも関わらず水は足首より上に来ない事を考えると多分大丈夫だと思っ

減る事もなく増える事もなくずっと一定に足首程度の深さ

雨が降ったら増えるかもしれない

「お、繋がった」

繋がった・・・とは通信魔術の事である

外のどこかに居るであろうセララに連絡して無事だと言つ事は知らせておこうと思った

いざとなれば同じ空間移動魔法で外に出ればいいのだがせつかくのダンジョンだ

もう少し探検してもいいだろう

今までの勇者体験ではこんなダンジョンは無かった

従者が居た為、しかも武器も最初に支給されるため入る必要性が無かったのだ

そのまま一直線に魔王の居るところに向かった

だが今回の場合は別である

今回の旅の目的はあくまで勇者に追いつく事

それは別に魔王が死んだ後でも魔王が死ぬ前でもどちらでもいい

あの勇者、鷹峰翠がやられるとは思わないし

「おいセララー、聞こえてるかー？」

セララ s i d e

「え、ちょ！何？何で！？」

ツバサが落ちた

落とし穴に落ちた

いきなり魔法陣が現れたと思ったら魔法陣が地面と一緒に二つに割れて落ちた

地面に食べられたの方が正しいような気がする

「ツバサアアア！！生きてるウウウー！？」

とりあえず地面に向けて呼びかけて見る

反応は当然無い

時々通りかかる旅人の皆様からの視線が痛いけど気にしない事にする

「おーーーーーい!!」

『お、繋がった』

はい？

突然頭に声が響いた

『おーいセララー、聞こえてるかー？』

死んだツバサの思い出が頭に流れているのだろうか

勝手にそんな想像

『死んでねーよ生きてるよ』

「それも異世界の魔法？」

『まあね。今なんかよく分からないダンジョンの地下に居るけど心配ないから先行ってて。適当な町に居れば合流出来るでしょ』

人がどれだけ心配したと思ってんだこのガキ

まあこいつが簡単に死ぬ訳無いか

ドラゴンを瞬殺した奴だし

『俺はしばらくダンジョン内探検してみるよ。それじゃ』

ブツリ

切れた

「とりあえず帰ってきたら一発殴ろうか」

私はそれを心に誓って次の町を目指す

しばらくはその町に滞在しよう

そういえば私って何でツバサについて行こうと思ったんだっけ

翔side

「さて、探検開始」

なんか一瞬セララが怒ってるような気がしたけど気のせいだと思いたい

きつと気のせいさ！

とりあえず探索魔術でこのダンジョン内の地理を把握する

強い魔獣の類は・・・12体

地下に潜る度に遭遇するらしい

階段の門番みたいな感じらしく階段前に佇んでいる

形状は

鼠、牛、虎、兎、竜、蛇、牛、羊、猿、鳥、犬、猪

なるほど、十二支ね

なんでそんなのにしたんだろうか

そして最後に人が一人

姿は俺と大体同じぐらいの体格

性別は男

髪は長い

ずっと放置してたのだろうか

微動だにしないが生きては居るらしい

探索魔術を終了させる

「水はあっちこっちから流れてるから困らないよな」

食料は探索して分かったけど魔獣でない生き物、食べようと思えば  
食べられそうな奴が大分居る

あちらこちらにちらほらと

この階にはあちこちに鼠が居る

さすがに鼠を食べる気はしない

地下二階は牛っぱいのがちらほらと

「そこ言っ事ね」

だとすると難関は竜と蛇

多分一番危険だともう

解毒魔法は一応使えるけど・・・

「こりゃ本気で行くべきかな」

魔道書を取り出し杖を捨てる

杖なんてあっても邪魔なだけだろう

ロープは鞆に入れ長袖の袖をちぎる

ここ蒸し暑いんだよ

靴には硬化魔術を使用した

蛇に噛まれても問題ないよう

鼠も当然含む

二階で食料を集めますか

迷路みたいになってるけど俺には通用しないぜ？

先代勇者様

## 十二支ダンジョン（後書き）

て事であと何話かで先代勇者の登場です

その前に13階にも及ぶダンジョンをクリアしなければならない訳ですが

それではまた次回！

ありがちなストーリーですみません！

ダンジョン編 子・丑（前書き）

ダンジョン編でどれだけ引き伸ばす気だよって言われそうだ

大丈夫です

10話に行かないはず・・・

多分ね！

てことで地下一階、子の階です

## ダンジョン編 子・丑

地下一階

ダンジョンを先へ先へと進む

迷路のようになっておりかなり複雑な感じだった

右に曲がり左に曲がり宝箱を開け鋼の剣を手に入れては捨て黄金は仕舞う

その繰り返しを行う

「お、また宝箱」

さすがはダンジョンと言ったところだろうか

いくらなんでも不自然すぎるくらいに宝箱があちらこちらにあった

勇者の趣味かそれとも畏か

今の所、畏っぽい宝箱は無かった

「  
」

魔術を使つて宝箱を開く

すると中から出てきたのは宝ではなく大量の鼠だった

「やっぱりね。」

炎を放ち鼠を駆逐する

やっぱりそういう魂胆か

本物の宝箱を置いてその後にくつつかの偽者の宝箱で仕留める

欲深い人間は大体ここで殺される訳か

「えげつないなあ・・・」

呟きながら残った鼠を駆逐し先へと進む

その部分だけ水が蒸発したがあつと言う間に元の状態に戻る

ただし地面にはクレーターが出来、それはそのまま残った

「それにしても広いなこのダンジョン。もう何時間歩いたっけ俺」

寄り道してるのもあるだろうけどそれでも広い

すでに数時間は歩いている

探索魔術でもう一度道を確認した方がいいかもしれない

「・・・マジかよ」

動いていた

このダンジョン地下一階の中の構造は常に変わっていた

横に移動したり縦に移動したり斜めに行ったり

「こりゃ探索魔術開きっぱなしで進んだ方がいいな・・・」

もう目印はあてにならない

探索魔術を使用しながら先へ進む

鼠は雷で焼き殺す

そろそろボス鼠の所に着くかなってまた動きやがった

横に動き続ける迷路はいくら歩いてもボスの所に辿り着けない

面倒にも程がある

また動いた

ブチッ

よし壊す

壁壊す

「  
「!!」

魔術詠唱

壁に向けて放った魔術は集中砲撃魔術

一箇所に力を集め一点にのみ攻撃を加える魔術

一点と言っても使用する魔術は莫大な量なので迷路の壁は跡形もなく消え去った

奥に階段が見える

「ゴォーッル」

迷路を動かしていた魔結晶も碎け散ったのか

迷路は既に動いて居なかった

「む・・・」

階段の前に立ちつくす何か

シルエットは鼠ではなく人だった

身長3メートル近い人

ただ頭には鼠の耳がついていたけど

デイーラのお土産にミーの耳がある

あれを付けた人

探索魔術で見た時は確かに鼠そのものの形だったのに



地下二階

牧場だった

緑色の草原が広がり牛がモオ〜と鳴いていた

あれだけあった水は一体何処に言ったのだろうかと思ったら牛舎らしき建物の中に全て流れ込んでいた

牛の飲み水にするのだろうか

牛舎は幾つもある

牛の種類は

「和牛？」

それも黒毛だった

ぼけーっとそののどかな風景を見ている俺

空が・・・青いな

って待て

なんで地下なのに空がある

「  
」

空に向けて炎弾を放つ

弾は上空にぶつかり爆発した

どうやら空はただの絵らしい

雲は動いていて太陽もある

随分とリアルな空だ

魔法細工？

「休憩所として扱ってもいいのだろうか・・・」

この階に対してこんな感想しか浮かばない

地面に腰を降ろし少し休む

すると

「ヴモオオオオオオオオオオオオオオオオ」

一匹の牛が突っ込んできた

防壁を張ると牛はその上を走りそのまま何処かへ消えて行った

どんだけ広いんだここ・・・

呆れつつも座って休むのは危険だと判断した俺は立ち上がり階段を  
目指して歩く

なおも突っ込んでくる数匹の牛を回避する

おとなしい牛から牛乳を搾ってみた

いいだろ一回やってみたかったんだよチクシヨウ

こう言うところじゃないと体験できないから

『ぎゅつにゅつをてにいった』

空に表示されたドラ エっばいウィンドウ

馬鹿にしてるのだろうか

そう思いつつも階段を目指して歩く

牛食っていいかなあ・・・

「・・・で、アンタがボス？」

「うむ。我は丑の階、階段番、マッスラー竹中」

どうやら二代目にネーミングセンスは無いらしい

0を通り越してマイナスである

ちなみに竹中の容姿は牛の角が生えている黒髪の青年

体格は細身で手にはゴツイ牛をモチーフにしたハンマーが握られている

ちなみにかなりのイケメン

なんでマツスラー竹中なんて酷い名前にしたのだろう

あれか？偶々作ったら出来たのがイケメンでムカついたから名前を  
適当にしたれやみたいな感じか？

「っーかマツスルじゃないよねお前」

注：ダンジョン編のボスは序盤はほぼギャグキャラとなると思いま  
す

ダンジョン編 子・丑（後書き）

ダンジョン編にまともな敵キャラは恐らく出ません

一階のネズミーランドのミ ーしかりマツスラー竹中しかり

3階以降も恐らく変なやつらしか居ないでしょう

中途半端にギャグですみません

それでは

ダンジョン編 寅・卯（前書き）

ダンジョン編

## ダンジョン編 寅・卯

竹中を撃退し階段を下りる

子・牛と来たからだから次は寅か

寅・・・虎・・・かあ・・・

トラ皮の絨毯作ったらいくらで売れるかなあ・・・

扉を開け地下3階、寅の階へ

「うおッ!!」

扉を開いた瞬間、トラが襲ってきた

白い虎、ホワイトタイガーね

振り下ろされた爪をナイフで防ぐ

「  
」

風属性の魔術で吹き飛ばす

「グルアアアア!!」

虎は木々を砕きながら飛んで行った

ちなみにジャングルね

ジャングルが虎なら蛇は何処に居るんだろう

「つーか先代の勇者って何者だ？」

移動魔法を100年・・・とまでは行かずとも数十年に渡って残すほどの力

魔力を流さずに

いや、移動する際に魔力を2割ぐらい削られたから魔力は使用されているんだろう

それに加えてこの広大なステージを作るだけの魔力は明らかに常人の比じゃない

最早三賢者クラスだ

その気になれば元の世界に帰れる

そう断言できる程の力だ

無理やり世界の壁をぶち破る事も可能である

その際体内の魔力をほぼ失うだろうが一般人には必要ないはず

やっぱり

「不老不死になったからか」

永遠に生きる人間が今までどおり暮していい筈がないと勝手に思っているのだろっ

不老不死なんて大した事じゃない

三賢者の一人は不老不死だし先生だって既に数百年生きている(らしい)

他にも何人かそれに近いやつは居たはずだ

そしてそれを元に戻す方法も既に確立されている

別に俺にとっては珍しくもなんともない

先生とその一人は戻る気も無いらしいが

今更戻っても意味はない、だそうだ

三賢者内じゃ最古参だったなあいつ

一般人に魔術の事については公開していないのでそれを知らなくても無理はない

だったら元の世界に戻りたくないと思ってもおかしくないか

とりあえずジャングルを進んでみる

時々虎を見かけるが目が合わない限り襲ってくる事はない

虎の他の生き物は居ないらしく見かけだけのジャングルだった

「次って何だっけ……子丑寅……卯、思い出した兎だ」

まあ今は関係ない事なので意識を寅に移す

目の前を横切る今度は黄色い虎を気配隠しの魔術でやり過ごす

そんな調子で進んでいると階段に辿り着いた

ボス発見

それは石像だった

虎の形をした石像

「……スルーしていいのか？」

「いい訳無いだろう」

石像にヒビが入る

そして中から出てきたのは虎の顔をした長身の男(?)だった

「虎の階、階段番、キジマ」

「キジマって……」

まんまじゃねーか

黄色い縞々 略 キジマ

呆れているとキジマは懐からダイナマイトを取り出した

「どんだけ……」

「吹っ飛べ」

ダイナマイトって……それ水に弱いんじゃない？

「」

下級の水魔法で十分だ

広範囲に水を撒き散らすただそれだけの魔法

魔力の使用量も極端に少なく初歩中の初歩の魔法

まして上から流れてくる水がここにもある

その為、威力もいつもの数倍になっている

まあ威力が上がるって言うっても水を撒き散らす範囲が広がったって  
だけなんだけど

ダイナマイトを無効化するなら十分だ

恐らくキジマの持っているダイナマイトも水で濡れて使い物にならないはず

「貴様、魔術師か？」

「正解」

「杖はどうした」

「いらぬよそんな物。」

水が浮き球状になる

そして段々と形を変え爪となり

「切り刻め」

キジマに牙を向く

いやまあ爪だけど

生々しい音が響きキジマが倒れた

ちなみに殺してない

急所以外の部位の肉を刻んだだけ

しばらくは動けないだろうけどガンバ

地下四階・卯の階

月面だった

しかも体が異常に軽い

重力も月と同じぐらいになっているようだった

「本当・・・先代の魔力は異常だな」

月だという事は大体想像出来ていたので環境適応魔術を使用して来たがどうやら正解だったようだ

地球の大気を自分の周りに固める魔術

量は2日分ぐらい

ただ重力だけはどうにもならないので諦めるしかない

いやまあ重力操作魔術ってのもあるけど竜と蛇と勇者の為に温存しておきたいから止めておく

多分、強い

遊びはここまでと違っていいはず

「実際はどうか知らないけども・・・」

探索魔術で見た限りじゃ竜は異常だった

多分相当苦戦する

「まさか、三賢者を脅かす化物がこの世界に居るとはね」

応援呼んどくか・・・？

いや、いいや

あいつらも仕事だろっし

それにこの程度なら問題ない・・・はず

いや、先輩として素人魔術師に負けてたまるか

って素人じゃねえや

この世界じゃ100年生きてるんだった

普通に生きてても年上である

「ハア」・・・」

軽く溜息

現実の厳しさを知った今日この頃

月面に居るのは兎だけだった

大体予想通りで兎があちらこちらで餅をついている

偶に餅を分けてくれた

餡子がついてたりみたらしだったりしょうゆだったり

毒の類が入っている様子は無かったしあんな目で見られたら断れない  
毒が入っても貰ってた

丁度腹へってたし解毒魔術もあるし

餅をかじりながら歩く

しかしさすがは月と言ったところだろうか

月そのものをほぼ等身大で再現してるらしく一向にゴールが見えない  
探索魔術を使っただけ見る限りでも丸一日以上はかかりそうぐらい広い  
無駄に広いステージってどうかと思う

ゴールがスタートの真裏側にあるってどういう事よ……

っーかなんで円形？

恐らく錯覚なのだろうがよく分からない

このダンジョンの構造がよく分からない

ありえない構造にも程がある

ほぼ四次元だ

「俺でも作るのに数ヶ月はかかるか……あるいは数年……先生

でも一日じゃ無理・・・か？」

どれほどの時間をかけたのだろう

どれほどの年月をかけたのだろう

分からない

「あ、ありがとう」

また餅を貰った

延々と無心になりながら歩く

偶に水を飲む

なんかあちらこちらに球状になって浮いてる

やっぱり上から来た水はここにも流れてきてるらしい

重力が少ないここでは水が球状になって浮かんでいる

「歩くの疲れたな」

とはいえ休んでる暇は無い

そもそもあちこちに居る餅つき鬼が味方とは限らない

寝てる間に襲ってくる可能性も否めないのだ

だから止まる訳には行かない

「ダアアアアア！！面倒くさい！！」

ダンジョンから出ようかとも思ったけどせっかく先代の手がかり、  
というか本人の居場所を掴んだのだから頑張ろう

まだ兎

地下四階という事は残り8階

+1

何日かかる事やら

時計を見ると何時の間にか大分時間が経っていた

時計のハリが大体一周している

そして巨大な杵（餅をつく道具）を持ったバニーガール……

ええ……

「卯の階！階段番のヴァニア！手合わせ願います！！」

そして杵を構えるヴァニアと名乗るバニーガール

髪の色は白、目の色は赤

出るところは出てて引っ込むところは引っ込んでいる

年齢は16ぐらいだろうか

まあ実年齢は確実にもっと上なんだろうが・・・

「戦いづらい・・・」

「それでも思春期である」

精神年齢も考えると30ちょいぐらい

「ブツ・・・!」

「ちょ、なに鼻血出してんですか!？」

「いやコレでも思春期だし・・・なんでバニー？」

「いや、あの、だって兎ですし!しょうがないじゃないですか!！」

「いやしょうがなく無いでしょ。しかもなんでアンタだけまともな名前なんだよ。今までの見ろよ。ミ　ーとマツスラー竹中とキジマだぞ?キジマはまだマシにしても残り2人・・・そいつら差し置いてまともな名前とは何事だツ!！」

「しょうがないじゃないですかあ!!--私が名付けたわけじゃありませんもん!!--勇者様が・・・」

「ああ、やっぱり勇者なんだ」

「しまったあああああああ!!--」

ドジツ娘バニー

うーん……

なんつーか虐めたくなる性格してるよこの子

でもそんな余裕は無いので

「  
」

眠り魔術

相手を眠らせる魔法、単純なやつほどよく効く

「はう！」

奇声をあげて気絶した

先へ進ませて貰いまーす

ダンジョン編 寅・卯（後書き）

竹中・・・キジマ・・・ヴァニア・・・

お前らの仇は俺が討つッ！ by 辰の階、階段番 ????

まあこんな格好いい事は言いませんけどね多分

竹中の扱いw

それではまた次回！

ダンジョン編 辰(前書き)

こんにちわ

明日からテストなばふんです

宿題をまったくやってない

今やっているところなばふんです

10ページぐらい残ってますが頑張ります！

てことどびーぞ

## ダンジョン編 辰

辰の階は何も無い広い空間だった

広いと言っても前回の月面ほどではない

アレは広いってレベルじゃない

今回は精神と時の部屋みたいな部屋だった

ただあそことは違い部屋の広さに限界がある

大体広めの体育館ぐらい

そこには白い竜と黒い竜が、見た感じの強さはSS級の上位クラスが一体の石像の左右に守るように佇んでいた

俺でもちよつとは苦戦した

「まあでも、その程度だったな」

地面に倒れ伏せる2頭の竜

所詮はこの程度

竜なんて俺にとっては脅威にもならない

この部屋で俺の脅威になり得るのは

「お前だよ」

俺は石像を睨む

すると石像にいつもどおりヒビが入る

やっぱりそう言う出方で来ますか

砕け散った石像から出てきたのは一頭の東洋の龍

「結局あんたも龍かよ。喋れんのか？」

りゅりゅう言いすぎてゲシュタルト崩壊して来たぜ

「ふん。馬鹿にするでない。そこに倒れている竜と私は違う」

「お

喋れるって事はかなり上位の龍である

伝説・・・いやむしろ神話級

龍はみるみる縮んで行く

そしてそこに立っていたのは一人の女性

また女性かい

「ふむ、この姿になるのは久々じゃの。というかそもそも石像から出るのも久々じゃ」

「そうか、ところであんた、先代に創られたものじゃ無いだろ」

「む、よく分かったのう。褒めてつかわす」

「ゴミ箱に丸めて捨てさせて貰う」

「残念じゃ」

軽いやり取りだけど俺は警戒を緩めない

さすがの俺でも通常の竜は倒せても神話級はちよつとキツイ

そもそもなんでそんな大物がこんな所に居るんだ

ありえねえ・・・

「勇者が創ったのはそこに倒れているやつらじゃ。まったく、生物を生成するなど、馬鹿げた魔力じゃ」

生物を創る

それは空間を作るよりも大変な魔力を要する

それが出来るのは先生を除くとあの変態ぐらいか

次元創造はその上ぐらい

生物と空間を創れてようやく次元の創造に入れるらしい

「そやつらは放置しておいてよいぞ。私はもう少し寝る」

「寝るのかよ。階段番の仕事はしなくていいのか？」

「おぬしに勝てるなんて思っておらんよ。それに、貴様が勇者なら私は止める必要はない。まあ」

危害を加えるのなら容赦はしないがな

龍は俺を睨む

ひるんだら殺される

だからひるまなかった

「やるのう。私の名は焰龍。覚えておくといい」

焰龍・・・ね

「それじゃあな。お休み」

言って焰龍は眠りについた

あと何年寝るんだろうな

龍の睡眠は人間の比じゃない

時間単位ではなく年単位で眠る

「zzzz・・・」

何年くらい眠るのだろうか

俺はそんな事を考えて下に降りた

運良く戦わずに辰の階を抜けたがハッキリ言えば結構ヤバかった  
精神的にヤバかった

「蛇の階行く前にちょっと休憩しよう」

階段で攻撃を加えてくる事は無いだろう

多分

まあ来たら来たでその時だ

この辺でちょっと寝る

一応、魔術防壁も張っておく

ここで張らないのはタダの馬鹿

定時連絡しといた方がいいかな

携帯を取り出し適当な番号を入力し魔力を流しながら通話ボタンを  
押す

p r r r r p r r r r

5回ほどコールがなつたところで相手が出る

「おつ変態」

『誰が変態だ。つたく・・・』

「お前に決まってるんだろ柊享也」

『僕は変態じゃない！仮に変態だとしても変態という名の紳士だよ  
！！』

「そうか。とりあえず定時連絡だ変態紳士」

『せめて変態の文字だけは抜いてくれないか』

「紳士って呼ぶのは嫌だからエロラギって呼ぶわ」

『柊と呼べ！もしくは享也！』

「分かったエロス享也って呼ぶな！」

『貴様・・・帰ってきたら覚えておけよ』

「分かった。忘却という名の筆筒に入れて保存しとくな！！」

『それは忘れておくって言うてるんだろ。言うてるんだな。言うてるんだろ！！』

「それで定時連絡だけ・・・」

「人の話を聞け！そもそも定時連絡なんて無いだろううちのギルドには！」

「まあね。本当は定時じゃなくてアレだ。神話級の龍が見つかった」

「な・・・ッ!?!」

「それとこつちに召喚された先代の勇者が見つかった。魔力はお前と同等ぐらいだ」

沈黙が流れる

「・・・それは・・・どうするつもりなんだ」

「当然、連れ帰ってギルドに入れる。不老不死をそのままにする訳には行かないし」

「不老不死だと・・・？そいつは三賢者のいい所取りか？いや悪い所か」

「そうだな。莫大な魔力も不老不死も普通は必要無い物だ」

邪魔でしかない

危険な物でしかない

その危険な物の居場所を作ったのがギルドだ

「それじゃ切るわ。用はそれだけだから」

『あまり無茶はするなよ』

「お前こそテクノブレイクで死ぬなよ」

『そんな嫌な死に方するか！！そもそもお前は僕を何だと思っ  
t  
プツリ

切った

「何だと思ってるって？変態だと思ってるんだよ」

俺はそのまま眠りについた

## ダンジョン編 辰（後書き）

刀と同じ名前な人（？）が出てきました

ちなみに竜人とは別の存在です

あれ、竜人だしたっけ

あと三賢者の2人目、柊享也が出てきました

ちなみにきょうやと読みます

ひいらぎは言わずとも分かるでしょう

主人公曰く変態ですが、別に実際に変態という訳ではありません

ただの不憫なキャラクターです

ちなみにテクノブレイクとは（自主規制）

あ、そうそう

連載打ち切ります

小鳩「ハア!？」

あ、間違えた。ダンジョン編打ち切ります

辰以降考えるのが面倒になって来た

そんな訳で次回、さつさと13階に到達させて先代勇者とのご対面

じゃまた次回！

ダンジョン編 巳(割愛)人(前書き)

ダンジョン編ラスト

今回は後半台詞多めです

ダンジョン編 巳（割愛）人

巳の階

草原だった

広い広い草原

多分、あちこちに蛇がいる

見えないけど大量に居る

下手に入れば噛まれて死ぬか

「でもまあ辰よりはマシ……か」

うわーなんかでかいの居る……

大蛇だった

30mぐらいの

遠くの方に何匹か

ずるずると嫌な音を立てながら動く蛇達

「フウ……、」

氷盤を魔術で作り風で浮かせる

コレなら蛇に噛まれない

「滅茶苦茶簡単なエリアっばいなこ」

浮かせながら時々コントロールして先へ進む

ここ以降は大したやつらは居ない

猪が最後ってどうなんだろう

干支順に拘っているようで強さ自体は龍が一番である

時折、こちらに噛みついてくる蛇の頭を落とし階段まで辿り着く

「巳の階、階段番、オロチ」

下半身が蛇で上半身が人間

顔はモヒカンの男

どこの世紀末？

とりあえず

「汚物は消毒だアアアア！！！」

「ぎゃ ああああああああああああああああああああ」

絶対零度の魔術を使用して氷漬けにする

一晩寝たおかげで体力は万全

たかが蛇でピンチになるほど俺は弱くない

地下13階

猪を倒し先代の元へ

已以降はもうマンネリな為、割愛させて置く

13階は町だった

普通の町

今居るのは住宅街だけど少し移動すれば普通の飲食店や書店なんかもある

完全に普通の町

元の世界に帰ってきたような雰囲気

というかこころって隣町じゃん

ちなみに元の世界の話

俺の住んでいた町から電車で一本の所にある町だ

飲食店に入ってみる

「らっしやい」

普通のオッサンが居た

入ってすぐの所に食券販売機がある

メニューはラーメンやら生姜焼きやら一般的なメニュー

ハンバーグがお薦めだそうだ

飲食店を出、書店に入る

本や漫画が立ち並び中には古本もある

ただその本は全て2004年に発売された物までしかない

それ以降は無い

ほとんどが記憶の中身を引っ張り出した物で再現されている為

少女漫画や振るい漫画なんかの中身はほとんど埋まっていなかった

人間は一瞬見ただけの物でも記憶として保管される

それは雨粒一つでも同じ

ただしそれを思い出せるかと言えば否である

出来るのは完全記憶能力者ぐらい

だけどそれは魔力を使えば別で、記憶の中の物を投影して作った空間と言うのは自分は覚えていなくてもちゃんと投影される物なのだからパツと見ただけでもちゃんと投影される

だけどそれをやる事は中々の重労働の筈だ

まあ、不老不死なら関係ないか

「先代は何処にいるんだろうな」

と言っても、大体予想はついている

10年前に見た新聞、俺の住んでいる町から電車で一駅の場所で行方不明事件があった

15歳の少年が行方不明

手がかりは無く八方塞り

ちなみに俺はその頃まだ5歳

魔術もギルドもまだ知らないお年頃

行方不明者の名前は四季夏希だった気がする



「魔術は使える。でも探索魔術は使えない。たく、面倒くさい」

魔術で手に火をともしながら呟く

飛んでも見えないから意味無し

いつそ壊すか

そんな事をすれば確実に信用を失い協力して貰えないかもしれない

俺の目的、それは先代勇者に協力を要請する事だった

せつかく会える機会を得たんだからここは仲間に入れたほうがいい

前にも言った通り先代の方が協力者としては適任だ

同じ世界から来たから話やすそうだし

とにかく四季という表札の家を捜すために走る

1時間ほど走った

「・・・ここか」

やっと見つけたぞチクシヨウ

インターフォンを鳴らす

今になって思う

鳴らさなくて良かったのでは？

癖なんだよ・・・

人の家に入る時インターフォンを鳴らすのは常識、ゆえに癖になりました

自分の家に入る時も親が居る時は鳴らす

鍵を渡されるのは都合で親が居られない時だけだから

鍵貰えないんだよ

放任主義なのにその辺だけ過保護だ

1分ほど待っていると

『はい』

出た

「茶番やってんじゃねーよ。今代の勇者、に巻き込まれて召喚された幼馴染の小鳩翔だ」

巻き込まれた、というよりもしかすると巻き込んだのかも知れないが、むしろ召喚魔法陣は基本魔力の量で選ぶから巻き込んだ可能性の方が高いのだが勇者になったのは鷹峰の方なのでここでは巻き込まれたと言っておく

『それで、その幼馴染が何の用？』

「詳しくは中に入って話そうぜ。入れてくれない？2004年から2014年までのジャンプが揃ってるぜ」

『分かった。いいだろう。別に僕が損する事は無いだろうし』

「出来ればお互いメリットがある話が出来ると嬉しいけどね」

『ほざけ』

切れた

1分ほど経って扉が開き中から白い髪を腰ぐらいまで伸ばした少年が出てきた

元は黒かったのだろう

時間が経つにつれて髪が白くなった

ついでに目も赤い

不老不死になると色素が抜ける

大体の奴がそうだ

黒染めする奴も居るけども

「よう。忌々しい先代の勇者の称号を捨てた人間」

「なんだその呼び方・・・まあいいや。僕は四季夏希。先代勇者、

って事になってるけどね」

好きでなった訳じゃないけどと呟く

「そうか。俺はさつき名乗っただろぅが改めて、小鳩翔だ。ちなみに今代の勇者は鷹峰翠だ」

「幼馴染で同じ名前って珍しいね」

「そうか？ツバサの小狼とさくらは同じ名前だぞ？」

「盛大なネタバレをしないでくれ・・・一応僕読んでたんだから」

そんな感じのやり取りをしながら家の中に入る

普通の部屋だった

キッチンがあり風呂がありダイニングがありリビングがあり寝室があり

家具があって電気もついている

水道も当然ある

「何もないけど座って。お茶ぐらいなら出すよ」

「信用できないな。侵入者にあんな試練を作ってるぐらいだ。毒でも盛るんじゃないか？」

「ゴメンね。その通りだよ」

「やるう」

警戒し合いながら下らないやり取りを交わす

「所で、ここにペプシコーラがあるけど飲むかい？」

「止めて置くよ。毒でも盛られそうだ」

「盛らないよ」

「そう？じゃあいただくよ」

といい飲む

と同時に吹いた

「ナニコレ・・・？」

「2009年発売、ペプシあずき」

毒は盛ってない

「不老不死だからって油断したよ」

「不老不死だからって油断するなよ」

「ハハハハハハ！」

笑う

「じゃあ、本題に入ろうか。何の用だい？」

「勇者捜しを手伝ってほしい」

「魔王退治じゃなくて？」

「なんで無理やり連れてこられたのにそんな下らない事をしないと  
いけないんだ？」

自分の尻は自分で拭け

そもそも勇者を召喚出来るだけの人員が居るのなら、闘技大会なん  
てやってる暇があるのなら魔王ぐらいさっさと殺せ

「勇者捜しって言うのは？」

「帰る手段はあるが幼馴染である勇者を見つけないと帰るに帰れな  
い」

「ふうん。そんな手段があるなんてね」

「この世界には無いさ。地球にも魔法はあるんだぜ？存在は隠蔽さ  
れてるけどな」

「僕の世界と別の世界から召喚されたんじゃないだろうね」

「俺の世界で四季夏希って奴が10年前に行方不明になった。お前  
だろ？」

「どつやら僕の世界みたいだね」

「まあ魔王退治もやるけどな。二度と出ないように完膚なきまでに潰す」

「そんな事が出来ると?」

「魔神を殺せば十分に出来る。辰の階の龍にも協力して貰う」

「だが断る・・・って言ったらどうする?」

「お前にもメリットはあるんだぜ?その不老不死を無くすとか、元の世界に帰すとか」

「魅力的な提案だね。でもこの世界の連中の前に姿を現すのは嫌だなア」

「100年も前の連中が生きても?この世界の人間にお前を知っている奴はもう居ないさ」

「いるかも知れないよ?本には一応顔写真みたいなのが載っているはずだから」

「じゃあ情報操作で消してやるよ。この世界でのお前の存在を」

「・・・分かった。僕の負けだ。君に協力しよう」

でもさ

「君の力なら探索魔術でその勇者を見つける事も出来るんじゃない

「？」

「生憎、今代の勇者に魔力はミジンコほどにも無いんだよ。ちなみにお前の魔力はとんでもないぜ？俺や俺の友人の変態ほどじゃないけどな」

「へエ」

「じゃあこっから出ようぜ。外に仲間待たせてる」

「仲間？」

「セララってこっちの世界の人間」

「勇者捜しならそれだけでいいんじゃない？」

「男女ペアってのは中々辛いぜ？龍も連れたら男子2人女子2人で丁度いい」

「内2人は女子とか男子って年齢じゃないけどね」

「それもそうだ」

「ハハハハハハ」

そんなやり取りの末、先代勇者、四季夏希が仲間になった

ダンジョン編 巳（割愛）人（後書き）

そんな訳で勇者が仲間になった

今回はセララと合流・・・する前にちよつと視点変更

それでは

ダンジョン編 終(前書き)

試験はまだあるぜえええええええ!!

期末なので成績にモロに関わりますがまあいいや

ちなみに明日は英語です

中学の時一番酷かったのは英語で1(恥となる為規制)点です

それじゃどーぞ

## ダンジョン編 終

先代勇者、もとい四季と龍、もとい焰龍がパーティに加わって、俺は久々に電車に乗っている

転生してからは電車に乗る機会があまり無かったなあなんて事を考えながら電車に揺られて出口を目指す

『終点』

なんて感じのアナウンスが鳴りドアが開く

ドアの先は以前、地面に食べられた時の場所だった

勇者の能力は予想通り創造能力だった

武器や鎧はもちろん

生き物や空間までも創造する能力

新しい世界は流石に出来なかったようだが

次元移動ぐらい出来るはずなんだけどな

やはり魔力も大事だけど知識も大事なのだろう

俺だってそもそも魔術の存在について知らなかったら使えなかった訳だし

ちなみに、12階までに居た11人の創造魔人は全て四季の中に戻った

会った時点では大した魔力は感じなかったが戻ったと同時に魔力の量が桁違いになった

とは言ってもまだギリギリ追い越されては居ない

筈・・・詳しくは専用の機械が無いと計れないし、魔力と言つのは成長する物だ

俺の魔力だってまだ成長している

「久々の娑婆の空気イイイ!!」

「娑婆つて・・・」

「出所して来た訳じゃあるまいし・・・」

呆れる二人を尻目にはしゃぐ俺

ちなみに電車の中でセララとは連絡を取ってある

今はアルマイルという街に居るらしい

名前からして大きそう、というか絶対大きいだろう

ベガとかもあるのだろうか

先ほどの場所から僅か1時間ほど歩いたところで辿り着いたアルタイル

あつと言つ間だった

近い街で待つてくれとは言つたけど本当に待つててくれるとは

「近くの宿で休んでるってさ」

「・・・便利だね君の魔法」

「魔法じゃなくて魔術。まあお前もすぐに使えるようになるさ」

魔力が段違いなんだ

使えない方がおかしい

まあ偶に広範囲殲滅魔法しか使えないなんて奴も居るけど

しかも魔力が低いからあつと言つ間にガス欠

一回限りの大魔法

「本当に使えるのかな・・・」

「とりあえず服買おうぜ。お前ポロポロじゃん」

「ついでにここ数年髪切ってないね。ずっと生きてると面倒になるんだよ」

「じゃあ床屋にも行つとくか」

そんな感じで色々回る

セララとの合流はまあ後回し

連絡は済んでいる

怒られたけどまあ殴られる覚悟くらいしてあるぞ

そんな訳で四季の腰までであった髪は肩ぐらいまで切りそろえられ、  
服は白で統一してみた

半ば遊びで

ちなみに序盤は全部四季が選んでいたのだが後半は焰龍が乱入し四季で遊んでいた

俺はそれを傍から見ていた

てなわけで、今の格好になるんだが

「お前女みたいだな」

「男だよッ!!」

怒鳴った

いつもおとなしいのになあ

いやでも本当に女みたいな顔をしている

肌は真っ白だし

不老不死でいると紫外線の影響も受けないから体の色素が抜ける事が多いのだが

実際三賢者のもう一人の奴も真っ白けだし

氷川さんも今は克服してるものの昔は真っ白だったらしい

というか克服ってなんだって聞きたい

不老不死は治っていない、というか治して居ないはずだ

「ハア・・・分かん」

「何が？」

「なんでもない・・・行くか」

次は武器だな

創造魔術と言っても魔力が無くなれば消えるらしい

あの空間に関しては焰龍も補佐していたからずっと残っていたけれど

今はもう残って居ないだろう

だから武器なんかは買ったほうがいい

武器屋に入る

せっかくだから俺も杖とナイフを買おう

あのナイフ全然役に立たなかった

すぐに刃毀れたし、杖もダンジョンで捨ててしまった

杖はもういい

ナイフ買おう

今度はじっくり見る

目に魔力を集中し呪いがかかってないかとかそう言うのも確認する  
呪いがかかっていると触れた瞬間くっついて離れなくなる

解呪も可能だがあの儀式は本当に面倒なのだ

それは当然四季も分かっているようで

四季や焰龍も注意深く観察していた

さーでどれにするか

量産型（？）はすぐに刃毀れするから駄目

メーカー札付きの奴は量産よりはマシだけどそれでもまだ駄目

掘り出し物はピンからキリまである

偶に呪いの品なんかもあるからな・・・

もし声が出なくなる呪いに掛かったりしたら解呪が出来ん

人に見せないといけなくなる

まあでも刃毀れしないのを選ぶには掘り出し物らへんを見るしかない訳で

呪いの品に触れないよう注意しつつ掘り出し物の中を見る

錆びた物や風化した物なんかもあるけどこれは駄目だ

磨くと偶にとんでもないお宝が入ってる事があるけど基本誰かが不法投棄した量産品だ

タダでさえ切れ味悪い物が一度錆びて余計に悪くなってるから最悪である

でも買う

いや、だって安いし

魔術使えば簡単に磨けるし

買ったものは風化して分かりづらいが片刃のようである

シルエットで何処まで確認出来るかが重要

まったく分からない物なんかはレア物である確立が高い

ここにはそこまでの物はない

コレが一番分かりやすい

まあいつそ魔術を使えば中の方まで見えるけどそれはやっぱりつまらない

こういうのも品定め醍醐味だったりする

つまり娯楽でやっている

アレだけ気を付ける事なんかを説明したくせに何を言ってるかも  
知れないがそういう性格なのと地の分が少ない気がするから地の文  
稼ぎである

「お客さん。それ買うならこの研磨石も使うかい？」

「いや。大丈夫。」

風化した部分を破壊する魔術

中から出てきたのは刀だった

「・・・なあ四季」

「なに？」

「この世界って刀あるのか？」

「刀ッ!？」

うお、凄い食いついてきた

「刀・・・か」

焰龍が呟く

刀に何か思い出でもあるのだろうか

「この世界に刀はないよ。僕も剣道やってたから刀が良かったんだけど見つからなくて」

「へえ」

「全然興味なさそうだね」

「ないからな」

そんな感じで刀を購入しついでにもう三本程風化した剣を購入する何が入ってるか分からないから

ちなみに一人一本、何が出てても文句は言わせないという事で買った四季と焰龍には言っていないが下手に選んで何が出てても責任は取れないので魔術を使って中身を見て選んだ

ちょっと反則だが地球の魔術を使ったところでこの世界の人間に分かるはずもない

そんな訳でセララがいる宿まで歩く

「ウオラアアア!!」

「べぶらッ!」

出会い頭に殴られた

いきなり顔面

「父さんにもぶたれた事ないのに」(棒)

とりあえずネタに走る事にした

そして後悔

この世界にこのネタを知っている奴はいない！！

案の定痛い目で見られた

四季がフォローしてくれなかったらどうなっていたか

「?・・・だれこの子ら。アンタまた女の子拉致ってきたの?」

「いや片方は女じゃないよ。先代の勇者。名前は四季夏希という。あともう一人は人間じゃなくて龍な」

「は?戯言を・・・人になれる竜なんて伝説・神話級ぐらいよ。こんな所にいる訳ないでしょ」

焰龍は何も言わない

事実だから

「とにかく、片方は男の子らしいけどもう片方は女の子なのね。結局拉致つて来た訳か・・・」

「拉致つてない拉致つてない」

「冗談よ」

このやろっ

はあ・・・

まあとりあえず、第一部完(?)

## ダンジョン編 終（後書き）

て事でダンジョン編完

前回鷹峰 sideと言いましたがゴメンなさい

タイトルが思いつかなかったので第9話として入れるつもりだった  
これをダンジョン編 終としました

という事で今度こそ鷹峰 sideです

それではまた次回！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3318t/>

---

異世界に行った転生者の魔術師

2011年7月20日05時02分発行